

枇杷塚遺跡・相岱塙址

－国道141号相岱交差点改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2019. 2

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

枇杷塚遺跡・相岱墨址

－国道141号相岱交差点改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2019. 2

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部



枇杷塚遺跡・相岱壘址 第1区調査状況



枇杷塚遺跡・相岱壘址 遺物出土状況

◆枇杷塚遺跡・相塙壙址のあらまし◆

本書で報告する枇杷塚遺跡・相塙壙址は、山梨県韮崎市藤井町北下條字枇杷塚に位置しています。本遺跡のある“藤井平”は、西に七里岩が立ち、東に塩川が流れる沖積低地で、韮崎市の中でも有数の穀倉地帯です。周辺には遺跡が数多く存在し、継続的な土地利用がなされてきた地域であることが知られています。例えば、枇杷塚遺跡に近接する上横屋遺跡や下横屋遺跡では、数次に渡って発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代までの多くの建物跡などが見つかっています。また、枇杷塚遺跡から3kmほど北にある宮ノ前遺跡では弥生時代前期の水田跡が見つかり、奈良・平安時代には400軒を超える建物跡が建てられていたことが分かっています。



弥生時代後期の遺物が出土した様子

今回の発掘調査は、国道141号相塙交差点の拡張工事に伴って行われました。枇杷塚遺跡は、平成7年度に韮崎市教育委員会が調査をしており、古墳時代中期の竪穴住居跡や土坑が確認されています。今回の調査地点は、韮崎市教育委員会が発掘調査した付近から南へ約120m先までの、南北に長い範囲で、竪穴住居跡2軒、小竪穴状遺構1基、土坑41基、ピット55基、溝4条、焼土跡3基、井戸跡1基が見つかりました。

竪穴住居跡の年代は、周囲から古墳時代の遺物が見つかっていることからも、古墳時代まで遡って考えることができます。

また、相塙交差点の北東角には、長方形の区画とともに、現在も土壙がわずかに残る遺構があり、相塙壙址と呼んでいます。今回、相塙壙址の区画内的一部分が調査範囲となり、中世に使われた“かわらけ”や内耳鍋が、土坑やピットから出土しました。特に、16世紀後半ころとみられるかわらけの出土もあり、これは武田勝頼が築城した新府城や、武田家滅亡後の天正・壬午の乱と同じころに位置づけられます。相塙壙址は、これまでその性格がほとんど分かっていませんでした。しかし、今回の調査によって、戦国時代ころまで遡って館などの施設があった可能性を示す、重要な成果を得ることができました。

ところで、相塙交差点は古くから逸見路が通り、穂坂方面と若神子方面を結ぶ重要な分岐点でありました。今回の工事によって、相塙交差点は見通しのよい道路となりましたが、この道路を通る際に、ふと地中から発見された物にも思いを馳せていただければ幸いです。



現在も調査区の裏に残る土壙の跡

序 文

本書は、平成 29（2017）年度に発掘調査が行われた枇杷塚遺跡・相岱塁址の発掘調査報告書です。この発掘調査は、山梨県県土整備部の国道 141 号相岱交差点改良工事に伴って実施されました。この事業は現状の相岱交差点を拡幅するもので、道路に沿って南北およそ 120 m の範囲を発掘調査いたしました。

発掘調査を行った地点は、古墳時代の集落遺跡である枇杷塚遺跡と、現状で土壘などが残存している相岱塁址として周知されています。枇杷塚遺跡は平成 7(1995) 年度に、韮崎市教育委員会によって、今回の調査区の北側が調査されており、山梨県内では貴重な古墳時代中頃の住居跡が見つかっています。相岱塁址は、土壘や区画の様子から、城館などの遺跡と推定されていましたが、これまで発掘調査の履歴がなく、詳しいことは分かっていませんでした。

今回の調査では、竪穴住居跡 2 軒、小竪穴状遺構 1 基、土坑 41 基、ピット 55 基、溝 4 条、焼土跡 3 基、井戸跡 1 基が見つかり、遺物はプラスチック箱にして 4 箱出土しました。出土した遺物の年代は、弥生時代後期から古墳時代、平安時代、中世後期、近世から近現代と非常に幅広く、特に「相岱塁址」の範囲内である調査区第 2 区からは、中世のかわらけや内耳鍋などが多く出土しました。これまで、その性格が分かっていなかった相岱塁址ですが、築造は戦国時代の頃まで遡る可能性が指摘できるようになりました。調査区周辺では、有史以前より人々の生活の場となっており、こうした成果は地域の歴史を解明する上で重要な発見といえるでしょう。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書作成に伴い、関係者の皆様に多大なるご理解とご協力をいただきました。深く感謝を申し上げます。本書が、地域における歴史学習や研究のために、多くの方にご活用いただければ幸いです。

2019 年 2 月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 馬場 博樹

例　　言

- 1 本書は枇杷塚遺跡・相岱墓址の発掘調査報告書である。なお、相岱墓址の埋蔵文化財包蔵地範囲は、枇杷塚遺跡の範囲内に含まれることから、本書内では遺跡を分けずに報告する。
- 2 遺跡の調査原因は、国道 141 号相岱交差点改良工事に伴うものである。原因者は山梨県県土整備部である。
- 3 遺跡は山梨県韮崎市藤井町北下條字枇杷塚 1399-1 外に位置している。
- 4 発掘調査・整理作業・報告書刊行は教育庁学術文化財課からの依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センター（甲府市下曾根町所在）が実施した。平成 29 年度・30 年度の調査体制は次の通りである。

調査主体 山梨県教育委員会　　調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
所長 中山誠二（平成 29 年度）・馬場博樹（平成 30 年度）　次長 高野玄明
調査研究課長 今福利恵（平成 29 年度）・笠原みゆき（平成 30 年度）
史跡資料活用課長 保坂和博（平成 29 年度）・今福利恵（平成 30 年度）
調査研究課リーダー 笠原みゆき・吉岡弘樹（平成 29 年度）・吉岡弘樹（平成 30 年度）
- 5 発掘調査は、吉岡弘樹（主幹・文化財主事）、山本茂樹・高左右裕（臨時職員）で行った。整理作業は、吉岡、高左右、報告書執筆・刊行は、吉岡、熊谷晋祐（文化財主事）、長田隆志（非常勤嘱託）が担当した。作業員については次の通りである。

発掘作業員 越石清一 齋藤義俱 名取貴大 萩原森嗣 樋川芳久 弘内茂明 松本昌 米山文徳
整理作業員 新谷和美 梶原初美 清水真弓
- 6 本書の第 1 章を長田が、その他は熊谷が執筆し、全体編集を熊谷と長田で行った。
- 7 遺構の写真撮影は、吉岡・高左右が、遺物の撮影は熊谷が行った。
- 8 発掘調査は、平成 29 年 6 月 15 日から 9 月 1 日まで実施した。整理作業は平成 30 年 1 月 9 日から平成 30 年 3 月 14 日まで実施した。平成 30 年度の報告書作成を平成 31 年 3 月 1 日まで実施した。
- 9 出土遺物の整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
- 10 本書に係る記録図面・電子データ、写真、出土遺物などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 11 発掘調査に係り山梨県教育庁学術文化財課が調整機関となり、久保田健太郎（埋蔵文化財担当）が担当した。
- 12 発掘調査にあたっては、道路の安全警備を甲府警備保障株式会社に、杭打ち・基準標高測量を昭和測量株式会社にそれぞれ委託した。
- 13 調査にあたり、次の方々からご教示・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。（敬称略）
　　閑間俊明・渋谷賢太郎・半澤直史（韮崎市教育委員会）、長谷川哲也

凡　　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は、各図中に示した。原則として、遺構の実測図は竪穴住居跡・竪穴状遺構は 1/60、溝状遺構 1/60、土坑・ピットは 1/40 とし、遺物実測図の縮尺は、土器 1/3、土製品 1/2、金属製品 1/1、石器 1/4 とした。
- 2 遺物の注記は全て「ビワヅカ」を冠して、調査区および取り上げ番号を明記した。
- 3 遺物実測図は胴部の小破片であっても時期が推測可能なものについては積極的に作成した。
- 4 遺構図版中のドットマークは遺物を示しており、付された番号はそれぞれの遺物に対応している。
- 5 遺構断面図の左側基点に付した数字は標高（m）を表し、方位もそれぞれ図版内に示した。
- 6 遺構の写真はコンパクトデジタルカメラ及び 35mm フィルムカメラで撮影した。
- 7 本報告書中遺跡分布図は、国土地理院発行の 1/25,000 地図及び韮崎市役所発行『韮崎市都市計画図 4』を利用した。
- 8 遺構図版内の焼土は薄墨で示した。遺物図版内の内耳土器の煤及び須恵器断面についても薄墨で示した。

目 次

卷頭写真図版	
あらまし	
序 文	
例言・凡例	
目次・図版目次・表目次	
第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の目的と課題	1
第3節 発掘調査の経過	3
第4節 室内調査の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	7
第1節 発掘調査の方法	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構	8
第4節 遺物	8
遺構図版	10
遺物図版	18
遺構一覧表	22
遺物観察表	23
第4章 総括	25
写真図版	
報告書抄録・奥付	

図 版 目 次

第1図 試掘トレチの設定と調査範囲の確定	2
第2図 工事設計図面と調査区設定図	2
第3図 遺跡分布図	5
第4図 遺跡周辺詳細図	6
第5図 枇杷塚遺跡・相塙墓址基本土層図	7
第6図 調査区全体図	9
第7図 第1区遺構分布図	10
第8図 第2区遺構分布図	11
第9図 第3区遺構分布図	12
第10図 第4区・第5区遺構分布図	13
第11図 第6区遺構分布図・詳細図	14
第12図 遺構詳細図(1区・2区①)	15
第13図 遺構詳細図(2区②)	16
第14図 遺構詳細図(2区③・3区・4区)	17
第15図 遺物図版1	18
第16図 遺物図版2	19
第17図 遺物図版3	20
第18図 遺物図版4	21

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	5
第2表 遺構一覧表	22
第3表 出土遺物一覧表	23

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経過

本事業は、国道141号相模交差点改良工事(韮崎市藤井町北下條字枇杷塚1399-1外)に伴うものである。国道141号と市道韮崎2号線が交わる相模交差点は、北杜市方面から韮崎市街方面に向かう右折レーンの幅が狭く、慢性的な渋滞が発生しており、このたびの工事において交差点の国道141号および市道韮崎2号線の東側を拡幅することにより、渋滞等の解消を図るものである。事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「相模塚」・「枇杷塚遺跡」に位置していることから、平成28年6月20日に県土整備部中北建設事務所峡北支所・学術文化財課・埋蔵文化財センターの三者で現地協議が行われ、平成28年9月27日・28日、10月26日の3日間をもって試掘調査を実施した。試掘調査では、10箇所のトレンチ中、北側の8号トレンチを除いたすべてのトレンチから、古墳時代および中・近世～近代の遺物包含層が確認された。また、一部のトレンチでは土坑等の遺構を検出し、古墳時代の土器片が出土した（第1図）。

枇杷塚遺跡は、平成7年7月に韮崎市教育委員会によりJAガソリンスタンド建設に伴って発掘調査が実施され、古墳時代の住居跡・土坑等が調査されている（韮崎市教育委員会1996）。相模塚の調査履歴はないが、「山梨県の中世城館」において、「韮崎市藤井町相模にある土塁で、現在集落の北に長さ30～40mほど残っている。（中略）この土塁は、集落と何らかの関係を有していたものであろう。この地には以前寺があったが今は万葉塔等が残るだけである」と紹介されている（山梨県教育委員会1986）。

試掘調査の結果から、平成29年度に記録保存のための発掘調査による埋蔵文化財の保護措置を執ることになった。平成29年4月14日には三者による事前協議を実施し、再度事業内容の確認を行った。平成29年5月26日、中北建設事務所峡北支所の担当者と最終の打ち合わせを行い、6月から発掘調査を行うことになった。

○調査に係る事務手続き

文化財保護法等に基づく本調査に係る事務手続きは以下の通りである。

[平成29年度]

- ・平成29年4月3日付で、山梨県県土整備部道路整備課長と山梨県教育委員会学術文化財課長とで道路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を交換。
- ・平成29年6月13日 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長および韮崎市教育委員会教育長へ提出〔教理文第143号：埋蔵文化財発掘調査の実施について（枇杷塚遺跡・相模塚）〕
- ・平成29年9月5日 文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ依頼〔教理文第321号：埋蔵文化財の発見について（国道141号相模交差点改良工事）〕
- ・平成29年10月2日 発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会学術文化財課長へ提出〔教理文第366号：埋蔵文化財発掘調査の終了について（枇杷塚遺跡・相模塚）〕
- ・平成30年3月23日 実績報告書を山梨県教育委員会教育長へ提出〔教理文第765号：実績報告の提出について（枇杷塚遺跡・相模塚）〕

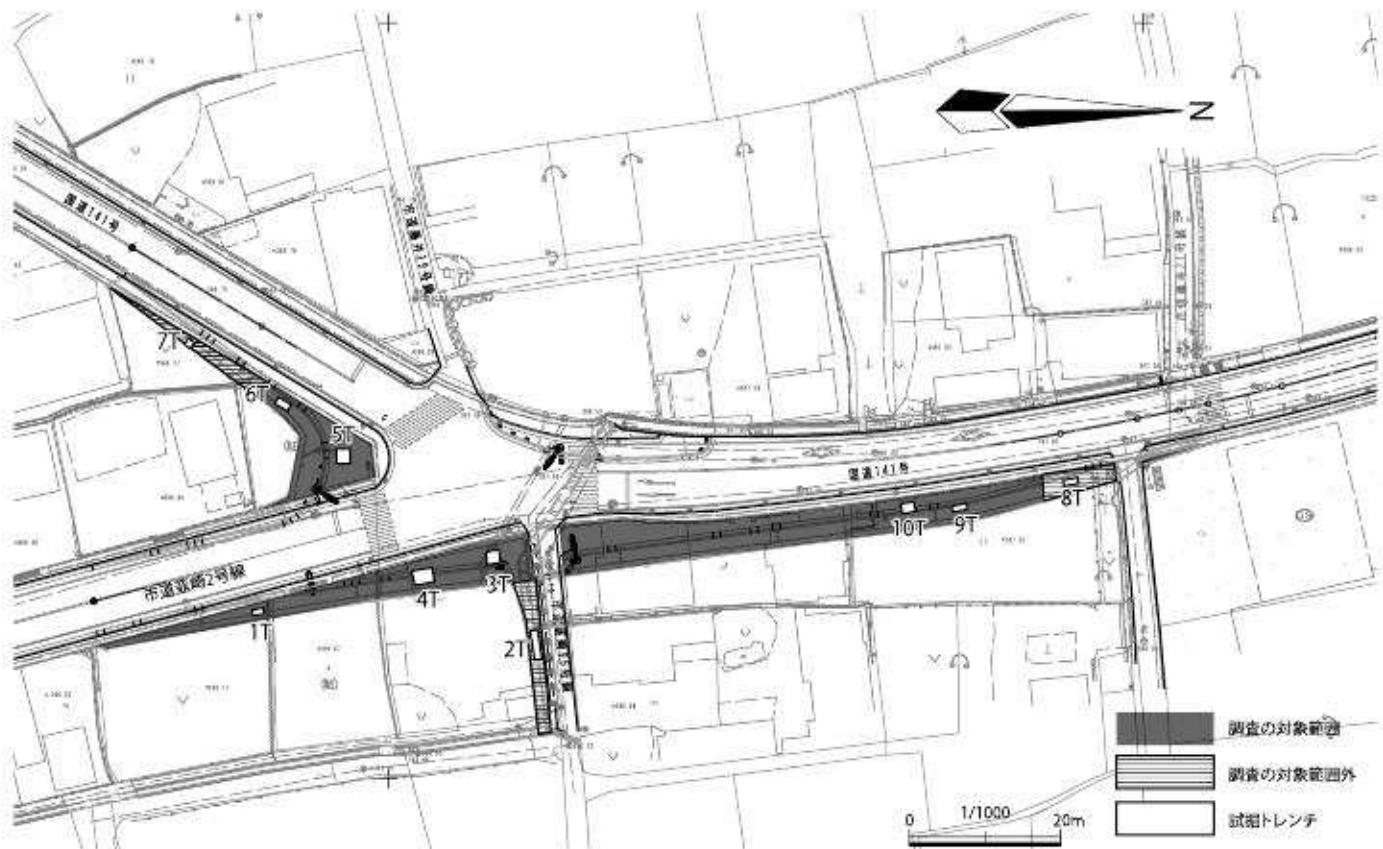
[平成30年度]

- ・平成30年6月6日付で、山梨県県土整備部道路整備課長と山梨県教育委員会学術文化財課長とで道路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査（整理作業）に関する覚書を交換。

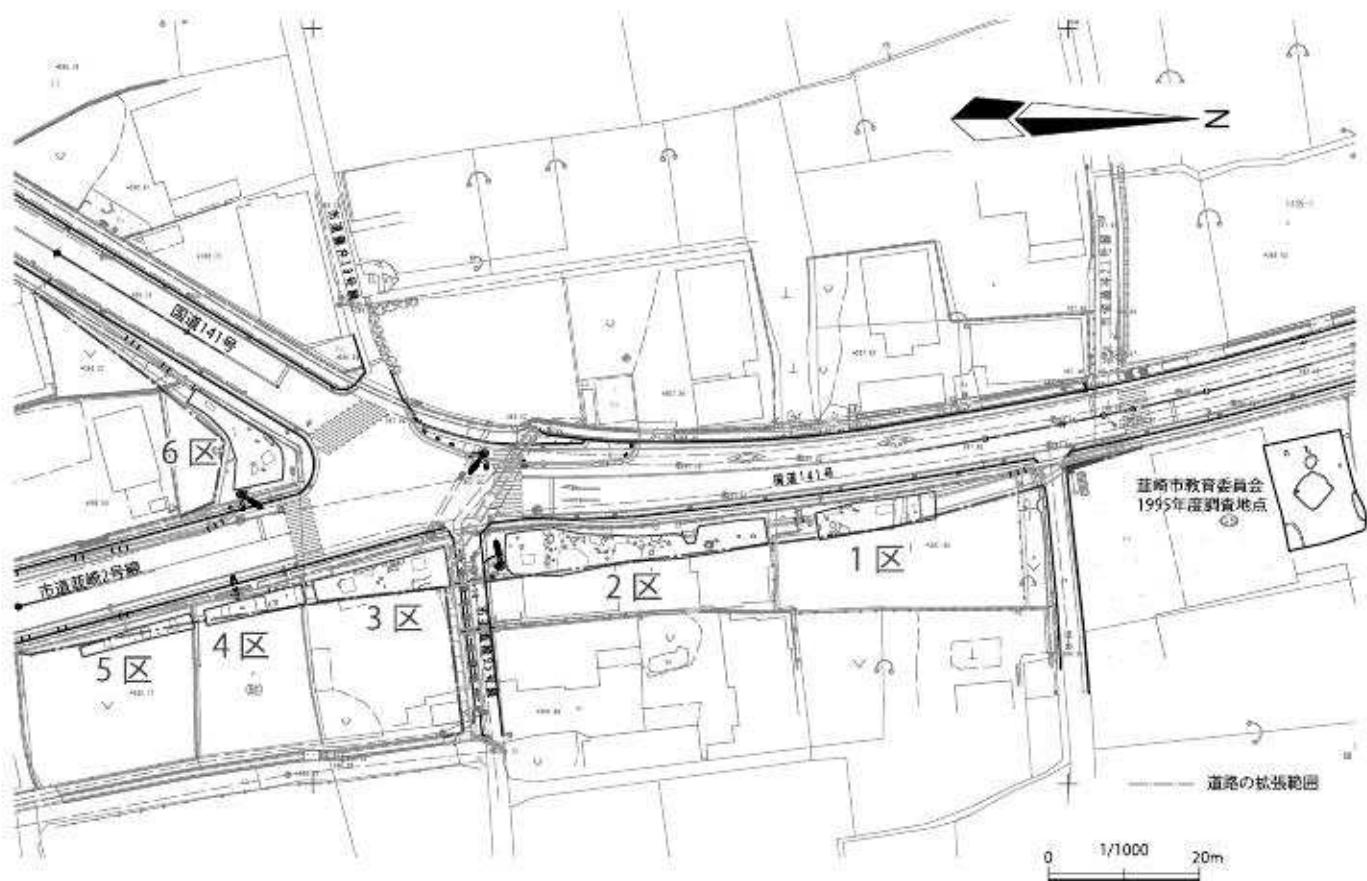
第2節 調査の目的と課題

平成28年9月27・28日、10月26日の3日間の試掘調査を実施した結果、遺構および遺物が検出されたことにより、埋蔵文化財の保護のため記録保存として発掘調査を実施することになった。

発掘調査地点は、「枇杷塚遺跡」と「相模塚」の2遺跡が存在している。「相模塚」は包蔵地範囲の一部



第1図 試掘トレンチの設定と調査範囲の確定



第2図 工事設計図面と調査区設定図

で土塁が残存しており、中世から近世にかけての城館などに伴う遺構と考えられる。しかし、その内容は文献等には残っておらず不明な部分が多い。今回の調査でその一端を解明する必要がある。

また「枇杷塚遺跡」では、平成7年7月に姫崎市教育委員会により古墳時代中期の住居跡・土坑等が調査されている。さらに、市教委が当遺跡の南に隣接した箇所で試掘調査を実施した結果、古墳時代と思われる遺物包含層と遺構も確認されているほか、西側に隣接する「下横屋遺跡」は、市教委によりこれまで数次の発掘調査が実施されており、弥生時代から平安時代の住居跡や溝跡、掘立柱建物跡などが調査されている。今回の発掘調査地点における弥生時代から平安時代にかけての遺構や遺物の分布状況を確認することで、藤井平における有史以前の遺跡の変遷や分布状況をより明確にしたいと考えている。

第3節 発掘調査の経過

試掘調査の結果および調査区の制約、廃土置き場の確保の点などから調査区を第1区から第6区まで設定した（第2図）。試掘調査後の計画段階では、廃土置場やプレハブ置き場を確保できないことが見込まれていたことから、表土剥ぎや廃土移動用の重機利用に係る期間や費用を多く見込んでいた。しかし、平成29年度以降の協議の中で計画予定地に隣接する土地をヤードとして使用できることとなり、調査工程を当初段階より変更している。なお、最終的な調査面積は、第1区57.5m²、第2区146.5m²、第3区71m²、第4区31m²、第5区27.5m²、第6区58.5m²となり、合計面積は392m²である。

発掘調査は北側の第1区と第2区から、平成29年6月15日より開始し、遺物包含層上面（現地表面から約70cm）までを平爪を装着したバックホーで掘削し、その後人力による精査をし、遺構確認と遺物の取り上げを行った。第1・2区の廃土は、第1区の脇に敷設板等を設置して仮置きした。また、交通量の多い国道141号に接しての調査であることから、安全対策のために全ての調査区に安全フェンスを設置した。遺跡・調査区の全体写真は、市街地の安全性に鑑み調査担当者が脚立等から撮影をした。

調査区ごとの工程は、第1・2区を6月15日から7月10日、第3区を7月10日から8月9日、第4区・第5区を7月10日から7月20日、第6区を8月10日から8月25日まで実施し、9月1日までに撤去作業を行った。各工区の調査終了時には危険防止のため埋戻しを行った。

第4節 室内調査の経過

枇杷塚遺跡・相岱塚の遺物出土量は、プラスチック収納箱にして4箱である。平成29年度の整理作業では、平成30年1月9日から3月23日にかけて、遺物の水洗、注記、接合、実測、トレース、版組作業を実施した。平成30年度の報告書作成・刊行作業は、平成30年6月6日から開始、原稿執筆・編集作業を進め、平成31年2月28日に報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

韮崎市は、山梨県の北西部に位置する。東は甲斐市、南から北西は南アルプス市、北から北西は北杜市と接している。本市は昭和29年に1町10か村が合併して成立した。その面積は143.44km²で、市名の由来は中世以来の地名によっている。

市域は、東に茅ヶ岳、西に南アルプス、北に八ヶ岳の山地に囲まれ、これらの山地に発する河川の形成した氾濫原・扇状地、ならびに火山裾野台地などの地形より構成されている。市域東側は茅ヶ岳南西斜面にあたり、その緩やかな傾斜地は古代には牧地に利用され、中世以来開拓が進み、現在では果樹栽培を中心とした農業が行われている。市域西側は、西部山麓地帯で巨摩山地断層崖下に展開する小扇状地群と八ヶ岳火山の噴出物が釜無川右岸に堆積した竜岡台地からなっている。

遺跡の位置する市域中心部は、南北に流れる釜無川と塩川に挟まれている。この間には八ヶ岳山麓から延びる韮崎岩屑流で構成された韮崎台地（通称：七里岩台地）が残されており、両河川の浸食によって台地の裾はほぼ垂直に切り立ち断崖となっている。一方で、低地は両河川によって氾濫原が形成されている。本遺跡が所在する藤井町付近は藤井平と呼ばれ、この地内を流れる黒沢川と藤井堰により肥沃で豊かな水田地帯となっている。

江戸時代の地誌『甲斐國志』には「藤井保」として、「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、下條、韮崎等ノ數村ヲ里人藤井ノ庄五千石ト云・・・」と記され、古くから穀倉地帯であったことを窺い知ることができる。

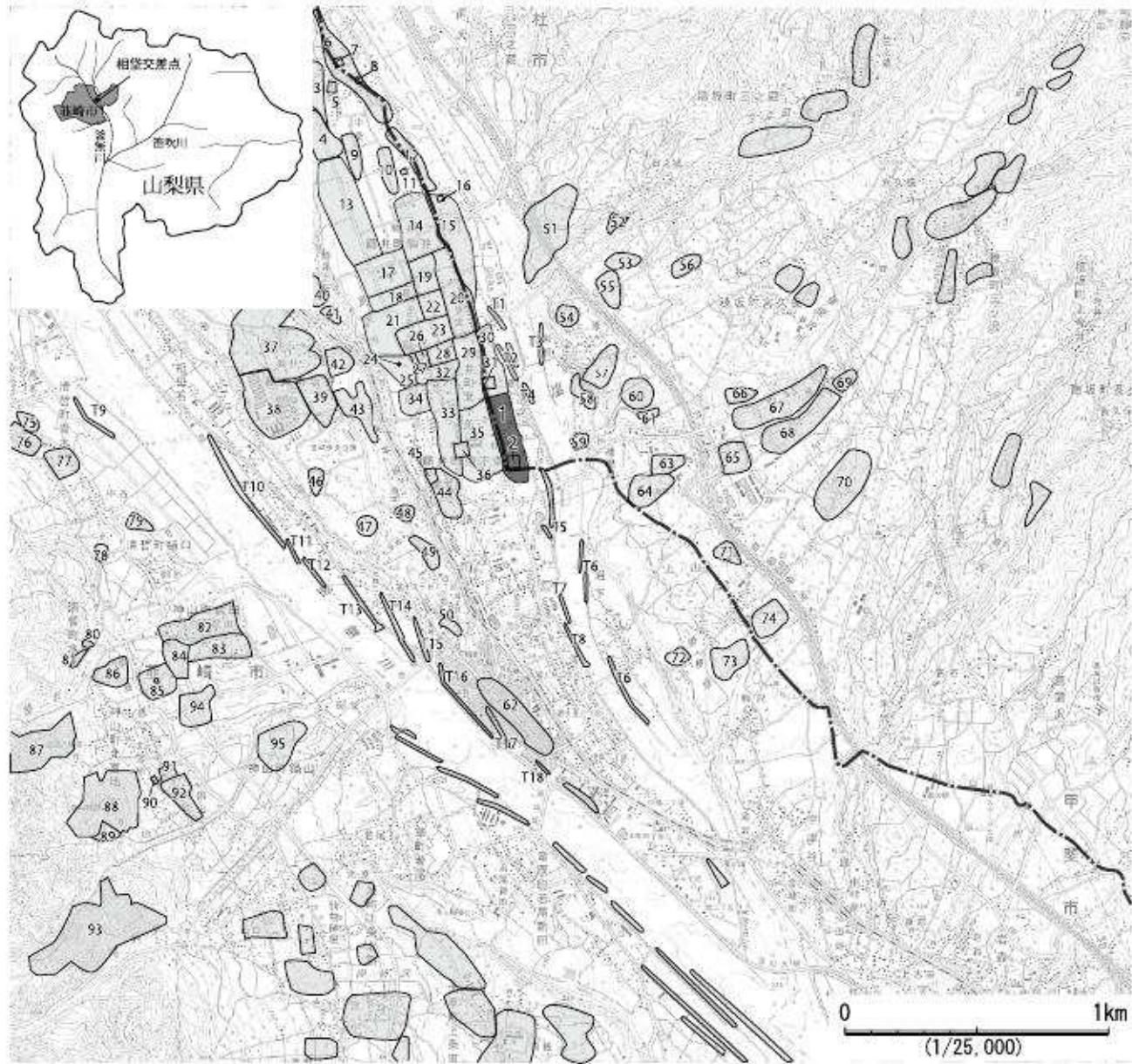
交差点名の由来となる「相岱」は、もともと南下条村の枝村であり、集村形式の農村である。「岱」は山梨県のいわゆる“方言漢字”であり、湿地で、水のじくじくした水田地帯に付けられることが多い。また、相岱交差点は逸見路の推定ルートとしても重要なポイントとなっている。交差点北東角には大正五年に藤井青年団相岱支部が建立した石柱の道標があり、東方向が穂坂村・御嶽方面、北方向が駒井村・若神子方面である。

第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する藤井平には、数多くの遺跡が確認されている（第3図）。縄文時代では宮ノ前遺跡（17）より縄文時代前期末の遺構が確認されるほか、中期後半から後期では、後田遺跡（21）などで集落跡が見つかっている。山影遺跡（44）では、縄文時代中期初頭の墓坑が調査された。また、本遺跡より西に6km、七里岩台地上の坂井遺跡（37）は、全国的にも著名な縄文時代前期から晩期にかけての遺跡である。弥生時代には、下横屋遺跡（35）で後期の集落の一部が調査され、近接する北下条遺跡（北下條殿田遺跡、33）からは弥生時代や奈良時代の住居跡が発見されている。また塩川対岸には三百水遺跡（63）があり、平成22年度に発掘調査が実施されている。七里岩台地上では、坂井南遺跡（38）において古墳時代前期を中心とした墓域を伴う集落が形成されている。古墳時代中期には当遺跡のガソリンスタンド地点で住居跡が見つかっている。古墳時代後期からは藤井平の開発が盛んとなり、上横屋遺跡（29）・坂井堂ノ前遺跡（23）、後田堂ノ前遺跡（28）などで集落跡が見つかっているほか、横穴式石室の露出する火雨塚古墳（24）が造られる。奈良・平安時代は、宮ノ前遺跡を中心とした大集落が形成される。宮ノ前遺跡は、平成元年から2年にかけて発掘調査が行われ、400軒以上の堅穴建物跡、50棟以上の掘立柱建物跡が確認されている。宮ノ前第2遺跡（13）では、奈良時代の寺院（仏堂）跡が発見され、瓦塔や鬼瓦の破片が出土した。

中・近世になると、武田勝頼によって新府城が七里岩台地上に造られ、昭和48年に国史跡に指定されている。この城の北約1.8km離れた場所には能見城が、釜無川を挟んだ南西約3.8kmには白山城（88）が存在している。また、相岱里と同様に、藤井平には蔵の前里址（31）、北下条里址（26）、三光寺里址（45）、殿田屋敷跡（36）などの、居館状に区画や土塁の残る土地があり、周知の埋蔵文化財包蔵地となっているが、その性格はほとんど不明である。

相岱地区は、江戸時代には南下条村の枝村となり、集落が形成される。相岱里址の包蔵地範囲北側には、昌安寺という寺があり、墓・石造物なども見られるが今は無住である。昌安寺は『甲斐國志』に登場し、「寿永山昌安寺（北下条村）曹洞宗慈法院未除地三畝八歩」とある。除地（境内を指すか）の面積は現状とほぼ同じである。本調査区内には、文政八（1825）年銘のある丸石道祖神が建立されていたが、工事に先立って調査区外へ移設されている。



第3図 遺跡分布図（点破線は逸見路推定線）

第1表 周辺遺跡一覧表

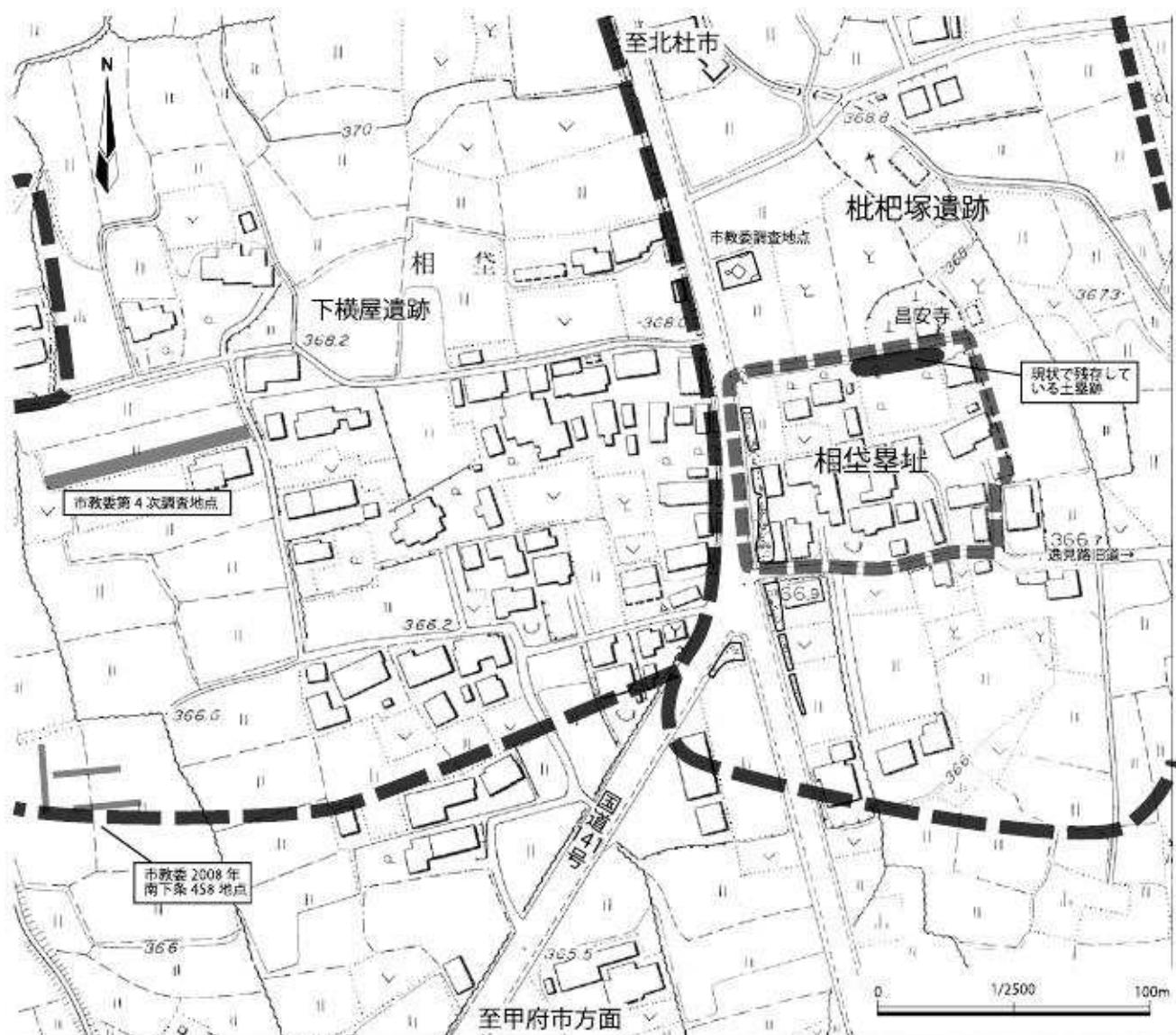
番号	遺跡名
1	松原塚遺跡
2	相生墓址
3	中田小学校遺跡
4	金山遺跡
5	水上氏屋敷跡第二
6	中田中條宿
7	松豊寺遺跡
8	水上氏屋敷跡
9	中田中條前田遺跡
10	立石遺跡
11	立岩遺跡
12	下木戸第二遺跡
13	宮ノ前第二遺跡
14	宮ノ前第五遺跡
15	駒井砂宮神遺跡
16	駒井氏屋敷跡
17	宮ノ前遺跡
18	北後田遺跡
19	宮ノ前第三遺跡
20	宮ノ前第四遺跡

番号	遺跡名
21	後田遺跡
22	堂ノ前遺跡
23	坂井堂ノ前遺跡
24	火薙塚古墳
25	三宮池遺跡
26	北下條塚
27	北下條後田遺跡
28	後田堂ノ前遺跡
29	上横座遺跡
30	宮不遺跡
31	藏之前壁址
32	後田第二遺跡
33	北下條殿田遺跡
34	櫻田遺跡
35	下横座遺跡
36	殿田屋敷跡
37	坂井遺跡
38	坂井南遺跡
39	坂井南大原遺跡
40	西御門遺跡

番号	遺跡名
41	西御門第三遺跡
42	坂井丸山遺跡
43	堂坂上遺跡
44	山影遺跡
45	三光寺墓址
46	岩上滝坂遺跡
47	淹坂遺跡
48	鷺井坂上遺跡
49	淹坂第二遺跡
50	富士見ヶ丘遺跡
51	日之城跡
52	宮ノ下遺跡
53	汁森遺跡
54	神ノ木遺跡
55	神ノ木第二遺跡
56	上ノ山立石遺跡
57	鷺坂上ノ原遺跡
58	ゴリノ木遺跡
59	権現沢遺跡
60	小森山ノ神遺跡

番号	遺跡名
61	山ノ神遺跡
62	斐崎宿
63	三百水溝跡
64	三百水第二遺跡
65	三百水第三遺跡
66	女夫石溝跡
67	鳥ノ小池南原遺跡
68	坊来石遺跡
69	鳥ノ小池遺跡
70	東坊來石遺跡
71	外輪原遺跡
72	内堀遺跡
73	石原場遺跡
74	高庭遺跡
75	竹原田遺跡
76	青木原田遺跡
77	青木原遺跡
78	矢口遺跡
79	青木東田遺跡
80	堆上遺跡

番号	遺跡名
T1	駒井砂宮神堤
T2	巣の前堤
T3	岩根前堤
T4	猿石島堤
T5	福井下河原堤
T6	桜の木堤
T7	更科一番堤
T8	更科二番堤
T9	青木下河原堤
T10	御崎原新田堤
T11	西河原堤
T12	海老鳥堤
T13	高柳堤
T14	大明神前堤防
T15	西表堤防
T16	越崎宿二番堤
T17	越崎宿一番堤
T18	船山堤



第4図 遺跡周辺詳細図



現在も残る土塁跡（位置は第4図中）



施行完了後の調査地点（第1区から南方方向）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区を1～6区まで設定し、調査区ごとに調査を進めていった。発掘作業にあたっては、重機により遺物包含層まで掘削した後、調査区に世界測地系（平面直角座標系「8系」X=138°30'00"・Y=36°00'00"）に基づく1辺5m間隔のグリッド杭を打設した。グリッド名については[X=-31,035・Y=-4,455]を原点として、東西方向（X軸）にアルファベット大文字で西からA・B・C…、南北方向（Y軸）にアラビア数字で南から1・2・3…の順に記号・番号を与えていた。

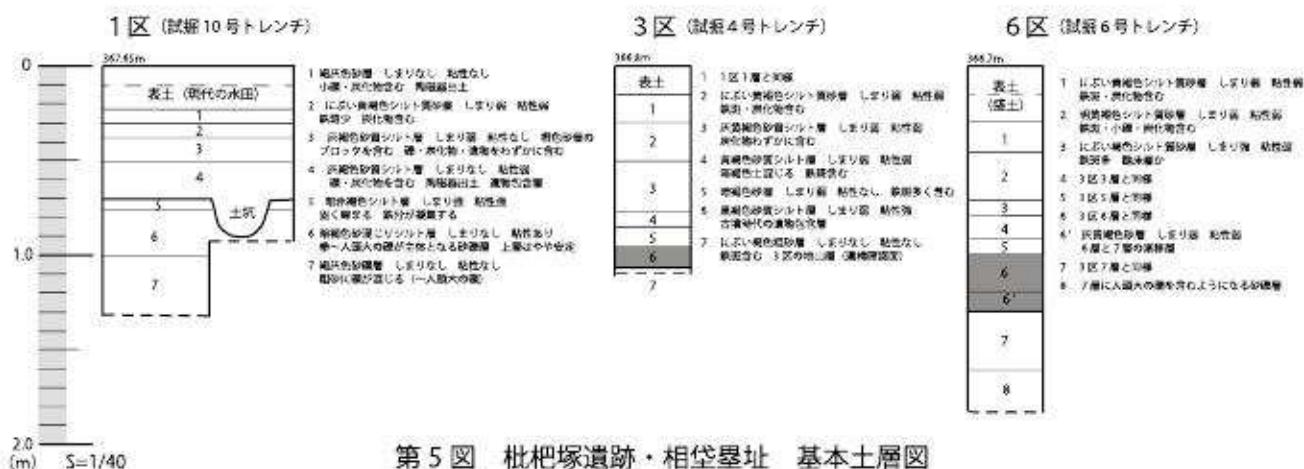
人力による遺跡の精査は、平面プランが確認出来たところで遺構の規模に応じて土層観察ベルトを設定するか半裁する方法で掘り下げていった。土層断面の観察・実測図化・写真撮影を実施したのちは、完掘して写真撮影、平面図の作成を行った。測量については、打設した基準杭を使用して、平板実測により遺構平面図の作成および遺物の取り上げを行い、位置情報の記録をとった。遺物や遺構は、調査区ごとに番号を付した。

調査の進捗状況および発見された遺構や遺物の確認状況などは、デジタルカメラや35mm一眼レフカメラにより撮影した。そのほか、調査地点が国道の交差点であるため、安全面を考慮し調査区と国道歩道の間に安全フェンスを設置すると共に、理髪店駐車場入り口部分付近の調査では警備員を配置するなど、常に安全に努めながら調査を進めた。

第2節 基本層序

便宜上、試掘調査で確認されたトレーナー層序に基づいて、調査区の基本層序としたい。

調査区は宅地あるいは水田として現代でも利用されていたため、水田層や盛り土層が表土として認められる。表土より下層の堆積状況は、調査区ごとによって微妙に異なる。調査区北よりの第1区では、地表下50cmから70cmほどにかけて灰褐色砂質シルトの遺物包含層が認められ、この層より下層で確認できる遺構の覆土となることがある。一方、調査区南側の3区や道路を挟んで西側の6区では、ほぼ共通する層序を確認した。3区・6区4層は共通の土層（灰黄褐色砂質シルト層）であり3区付近では厚く堆積する。ラミナは確認できないが、水性堆積の可能性もある。また3区・6区の6層（地表下1.0m程度、黒褐色砂質シルト層）は、主に古墳時代の遺物を含む土層で、下層の7層（にぶい褐色粗砂層）上面で遺構確認ができるが、7層以下は砂礫を含む層が続き遺構や遺物は確認されなくなる。3区・6区の6層や7層は、周辺の遺跡においても共通する遺物包含層および確認面だが、相生塚の範囲に含まれる1区や2区では連続的な土地利用が行われてきたためか、これらは安定せず異なる様相を示している。



第5図 枇杷塚遺跡・相生塚 基本土層図

第3節 遺構（第7図～第14図）

竪穴住居跡2軒、小竪穴状遺構1基、土坑41基、ピット55基、溝4条、焼土跡3基、井戸跡1基が検出された。

1. 竪穴住居跡

・1号・2号竪穴住居跡…調査区第3区、F9グリッドに位置している。2号住居跡のほうが検出面からの掘り込みがやや深く、1号住居跡を切る形で土層堆積が確認されている。1号住居跡は1辺約3.0m、2号住居跡は1辺約2.6mで、遺構の西側はほとんど調査区外である。炉跡あるいはカマド跡などは確認されない。覆土内からは遺物が見つかっていないが、上層の小破片や3区の遺構外遺物から、時期は古墳時代まで遡る可能性が高い。

2. 小竪穴状遺構

・1号小竪穴状遺構…調査区第3区、F9・10グリッドに位置している。方形か長方形のプランと考えられ、1辺は約1.6mで、西側は調査区外となる。遺構の上層から元豊通寶が出土していることや、同様の遺構が県内で見つかっていることから、中世に位置づけられるものと想定される。

3. 土坑・ピット

調査区ごとでは、第1区に土坑9基とピット5基、第2区に土坑24基とピット31基、第3区に土坑3基とピット12基、第4区に土坑2基とピット1基、第6区に土坑3基とピット5基が検出された。

このうち、第2区7号土坑は炭化物の集積する層が認められた。同じく第2区の9号土坑・10号土坑は重複する土坑だが、いずれも15世紀～16世紀と想定されるかわらけや内耳鍋の破片が出土している。なお、第2区10・11・15・18号土坑は、正方形のプランで結ばれ、柱間の2基の土坑も対になる。建物跡の可能性も考えられるが、調査区が狭小であることと、整理段階での検討のため、想定にとどめておく。

4. 溝

第1区から2条、第2区から1条、第3区から1条の溝が検出されている。第1区の1号溝・2号溝は東西方向に並列しているが、いずれも近世のものと推定される陶磁器片が出土している。第3区の1号溝からは、平安時代と思われる土器が覆土および上層から確認されている。

5. そのほかの遺構

1区から焼土跡が3基、2区から井戸跡が1基、4区で不明遺構1基が検出されている。井戸跡はガラス等が出土しており最終埋没時期は近現代と推測される。

第4節 遺物（第15図～第18図）

調査区内から、コンテナ4箱分の遺物が出土した。遺物は土器・土製品・金属製品・石製品などがある。

1. 土器

①弥生時代後期の土器…1、3～7、22～24。5は有段口縁壺で、弥生時代の終末に位置づけられる。

②古墳時代中～後期の土器…胴部の破片が多いため時期の細別が困難だが、2、65～67、69～75、77～83などが該当する。65や79などの須恵器片も存在する。

③奈良・平安時代の土器…68が甲斐型壺、76はいわゆるロクロ整形の壺である。

④中世の土器…かわらけは多数の出土(14、26～28、32～36、38～47、49～50、84)があり、多くは15世紀後半～17世紀初頭の範疇と思われる。内耳鍋(25、29～31、37、48、51～53、56～62、85)も出土点数が多いが、ほとんど破片である。他に香炉(54？、63)、青磁(55)がある。

⑤近世～近現代の土器…9～13、15～21、64のほか、未実測の遺物にも近現代の陶磁器がある。

2. 土製品

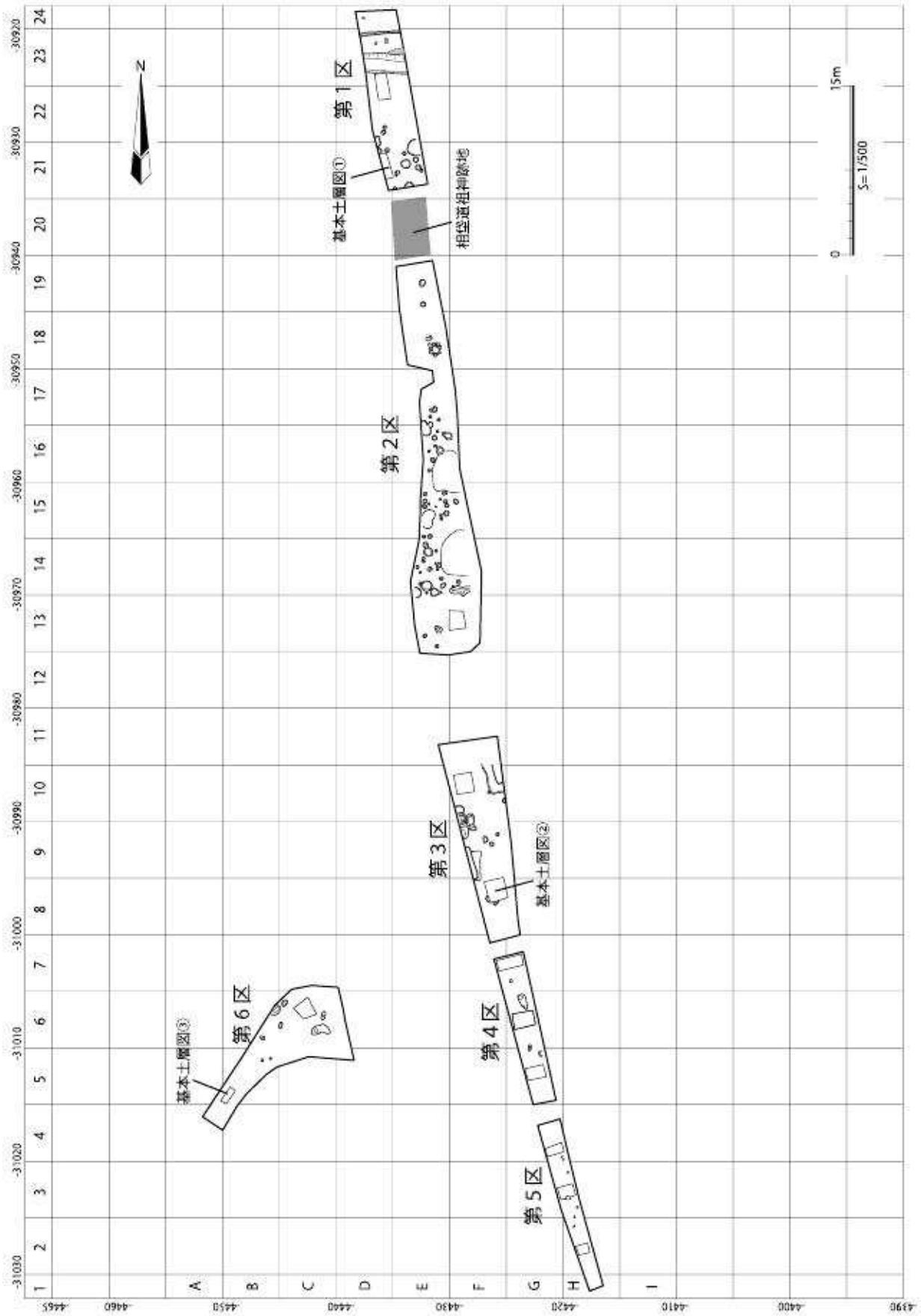
86は土製円盤で、中世の内耳土器を利用した物とみられる。

3. 金属製品

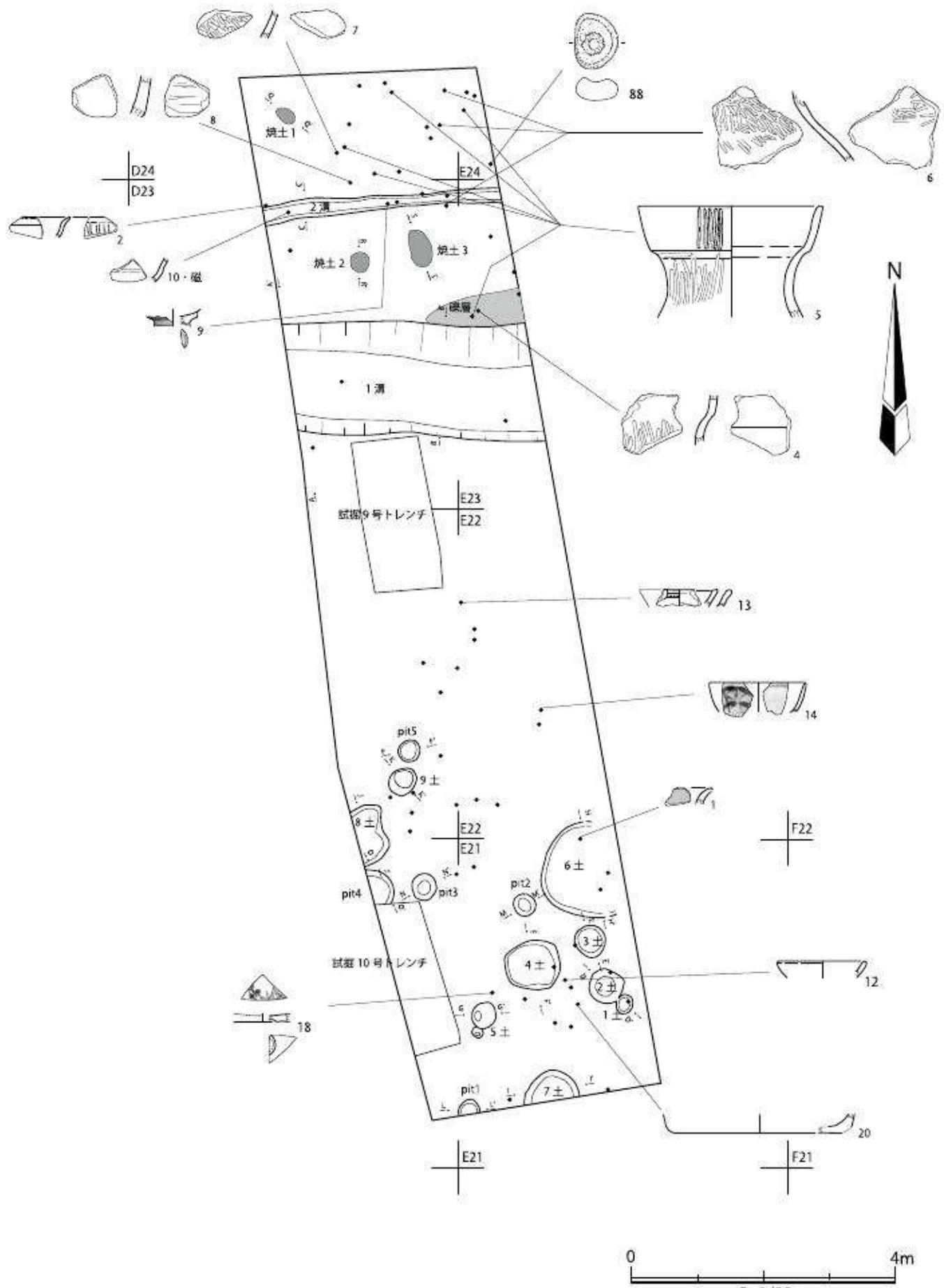
87は篆書体の元豊通寶(1078年初鋤)。

4. 石製品

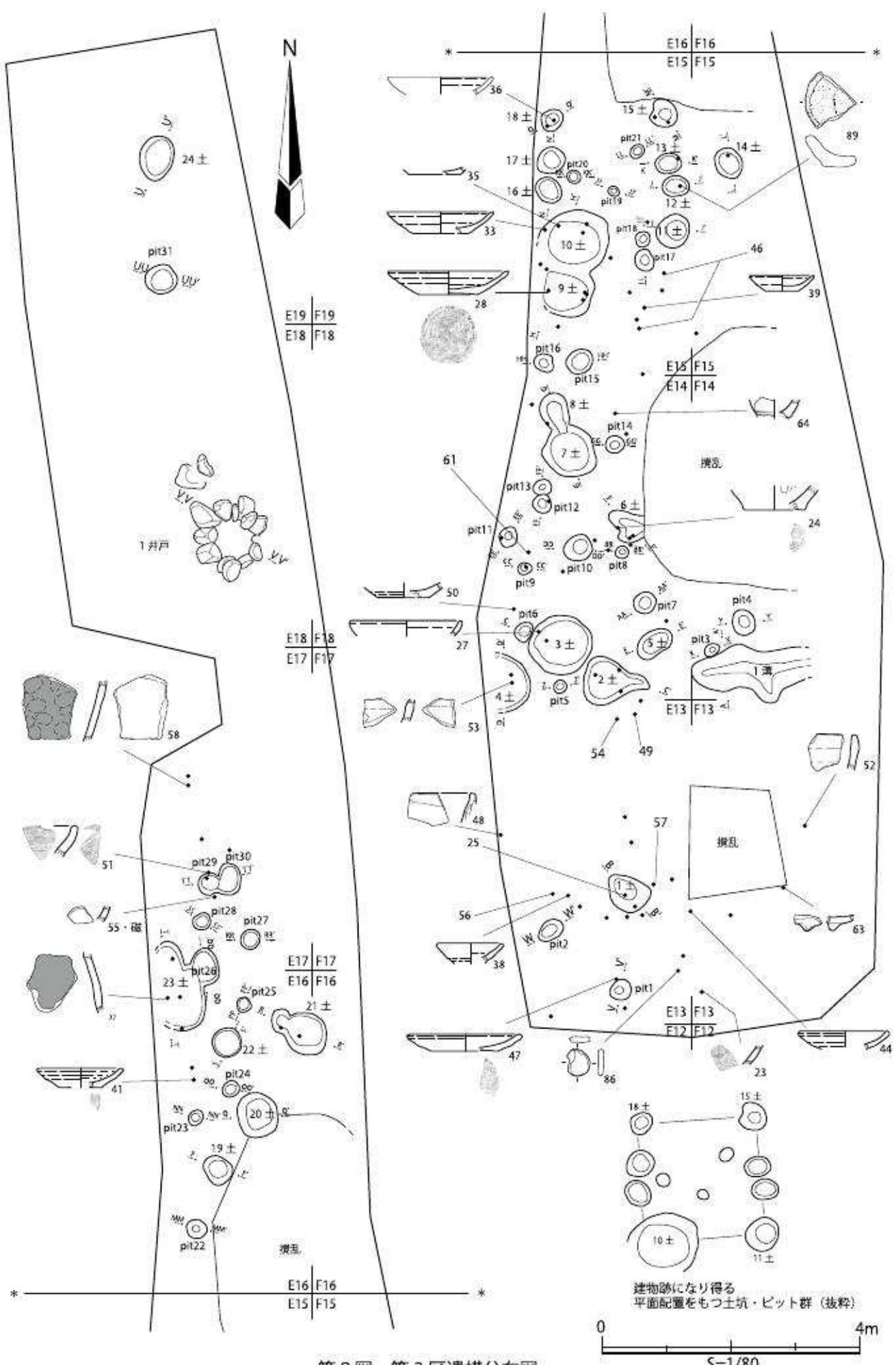
88は凹み石あるいは石皿。89はひで鉢で、中世まで遡るか。90は井戸跡より出土した石臼の上臼である。



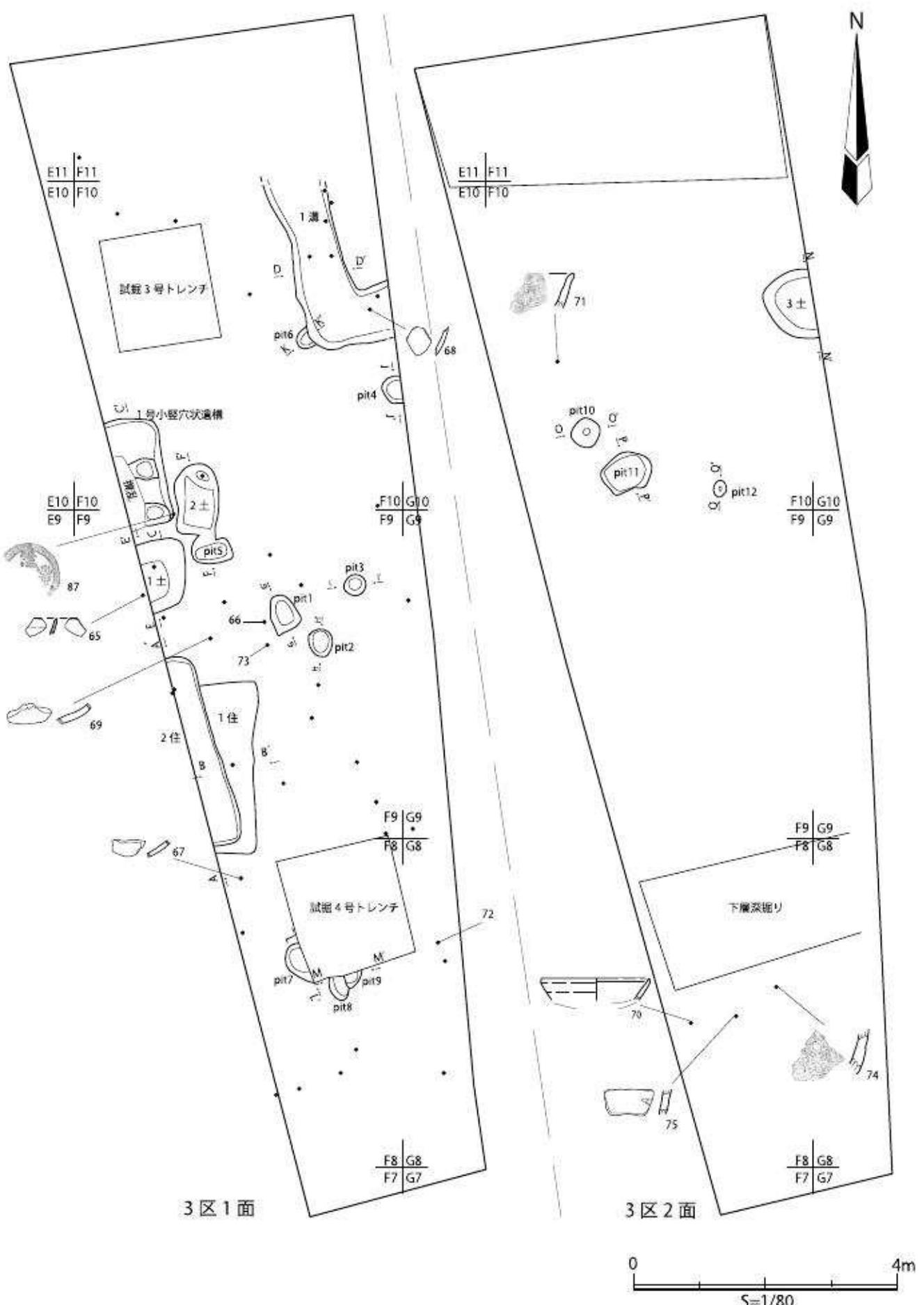
第6図 調査区全体図



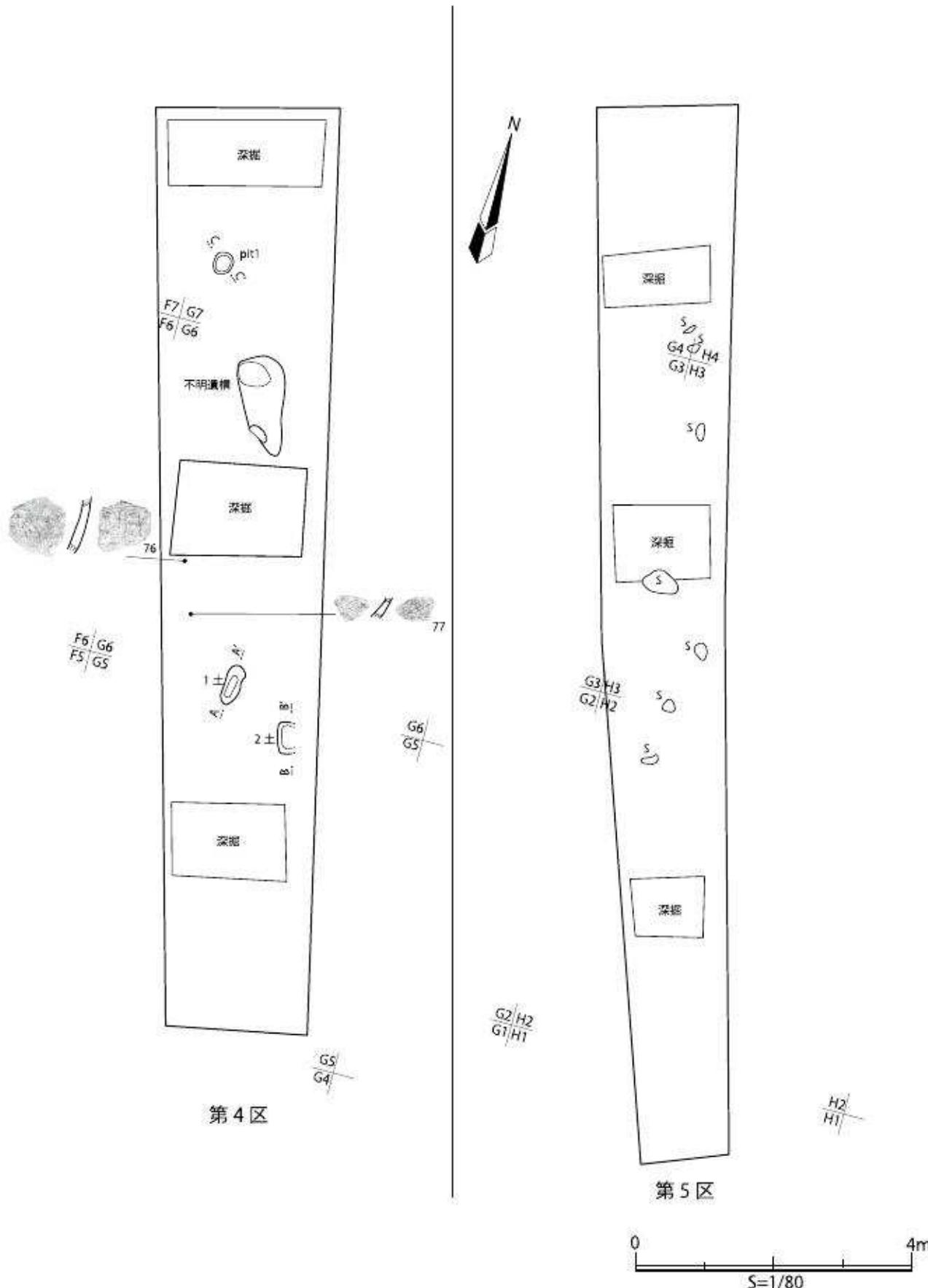
第7図 第1区遺構分布図



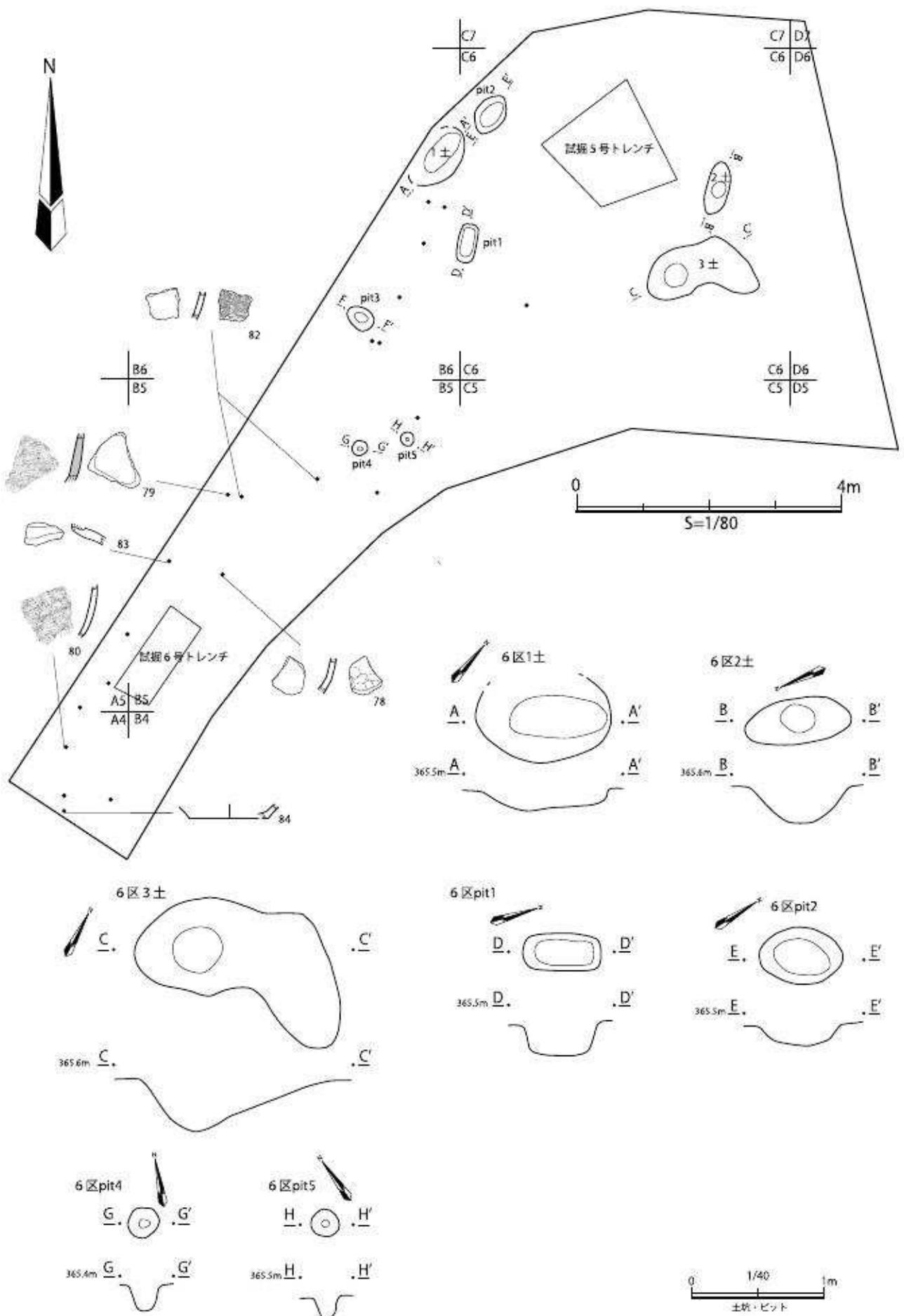
第8図 第2区遺構分布図



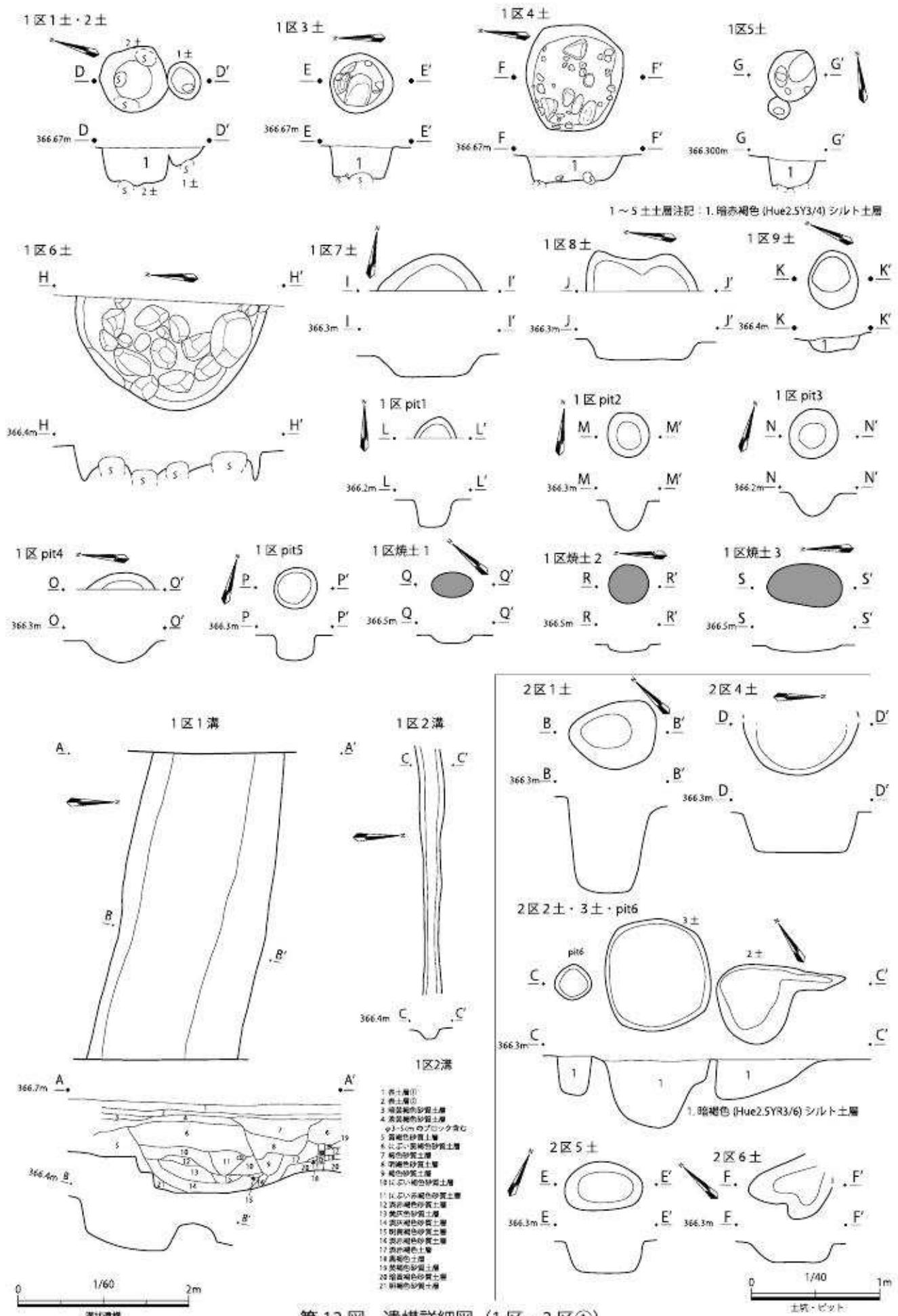
第9図 第3区遺構分布図

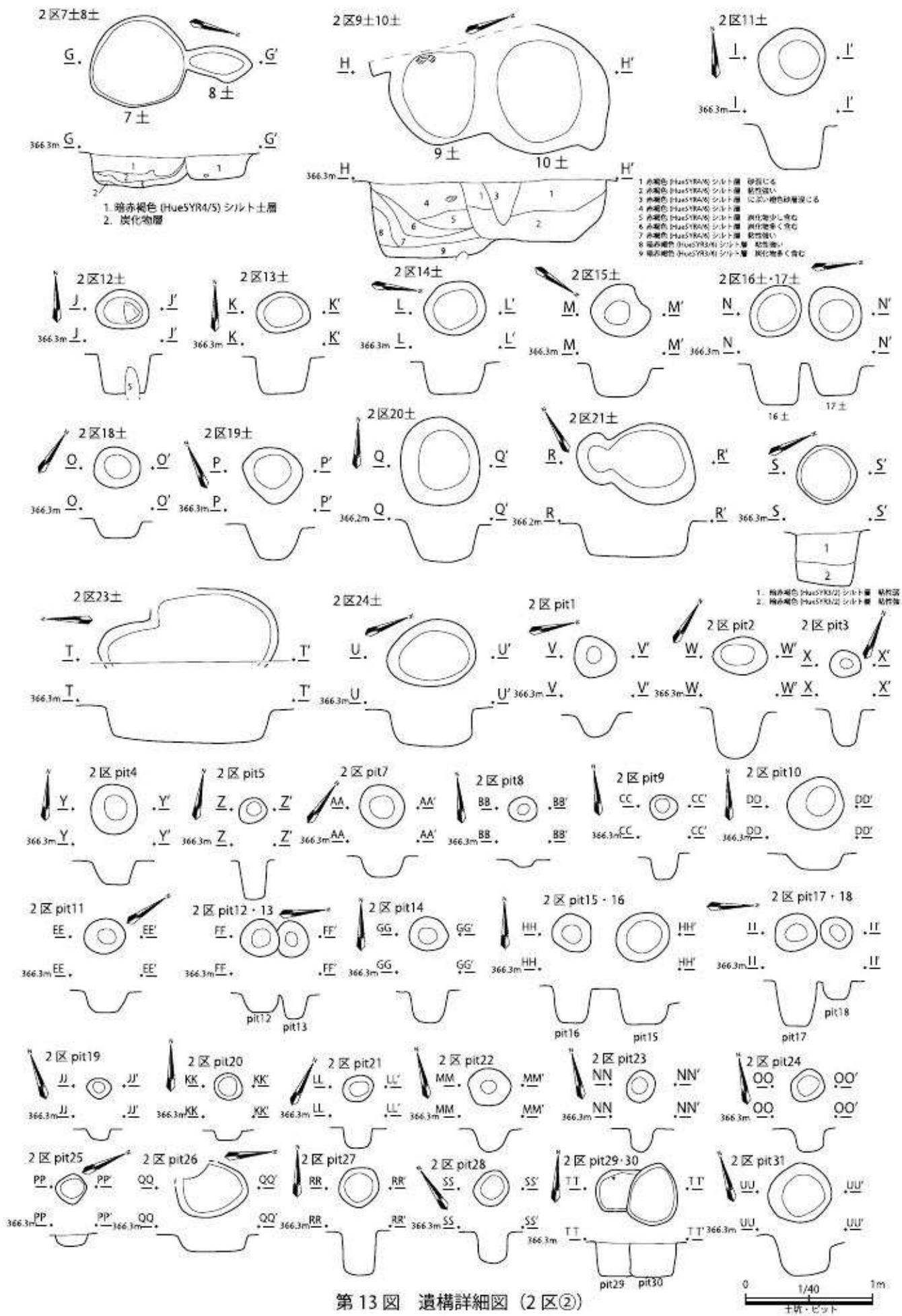


第10図 第4区・第5区遺構分布図

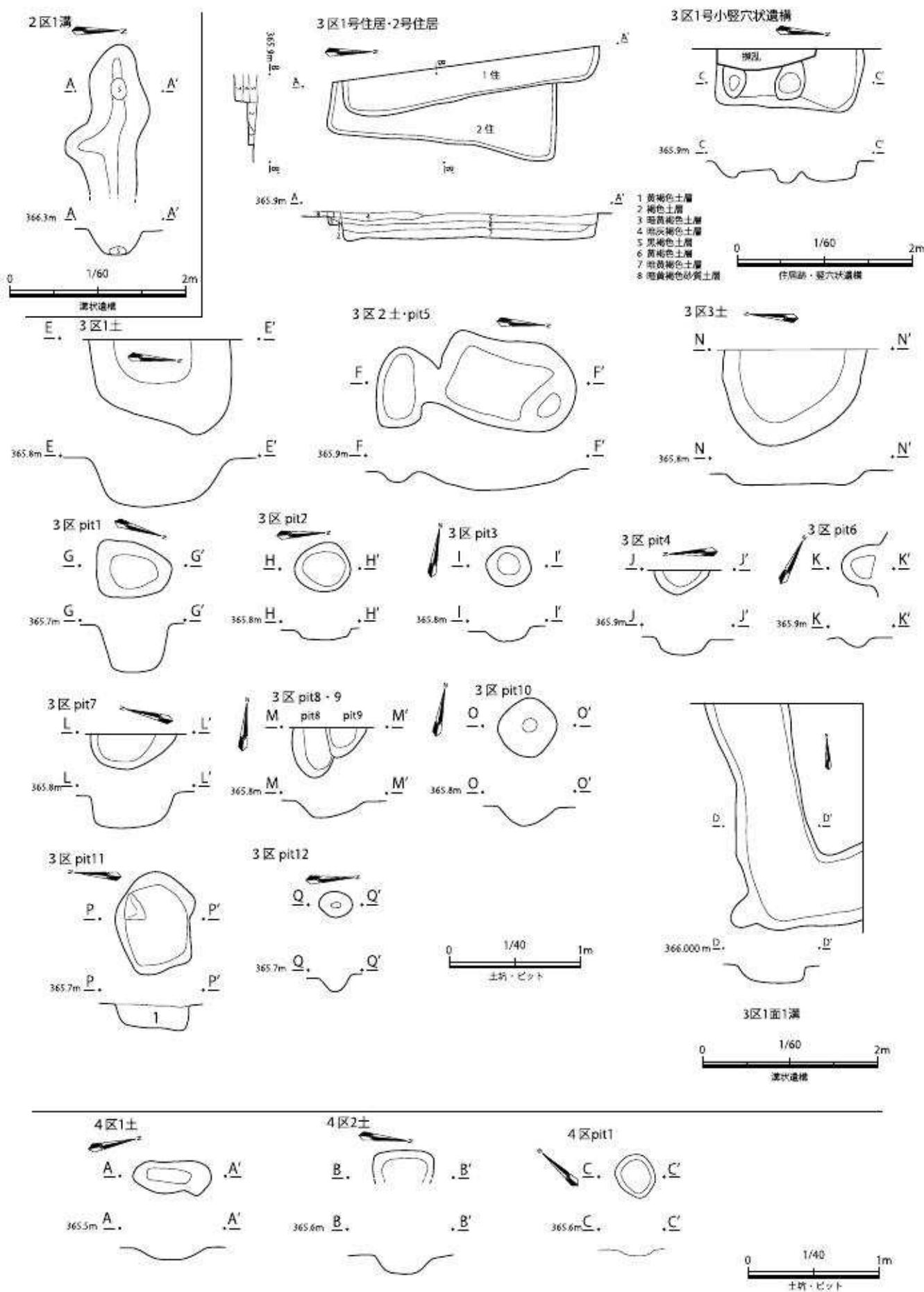


第11図 第6区遺構分布図・詳細図



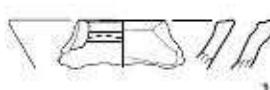
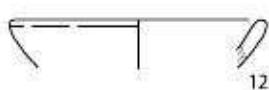
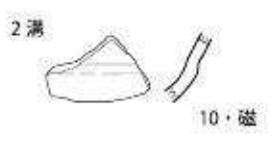
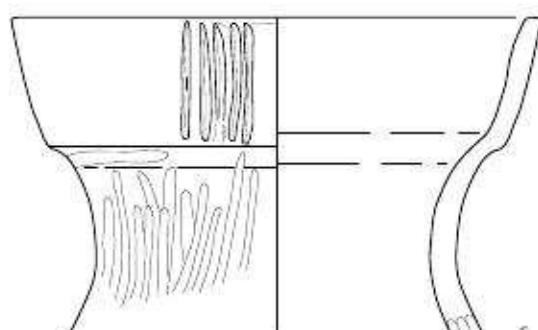
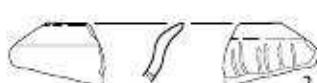


第13図 遺構詳細図 (2区②)



第14図 遺構詳細図 (2区③・3区・4区)

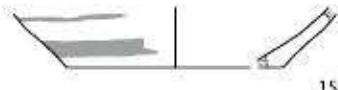
1区



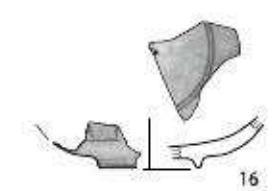
13



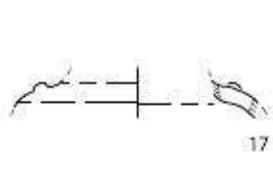
14



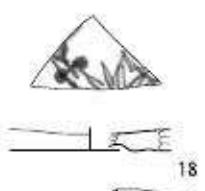
15



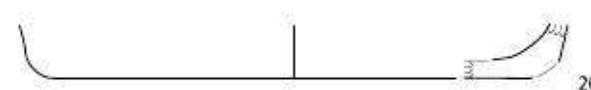
16



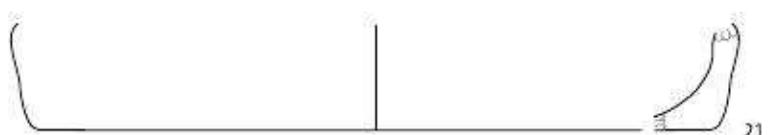
17



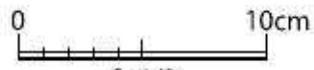
18



20



21



S=1/3

第15図 遺物図版1

2区



23



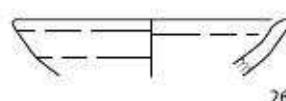
24



1土

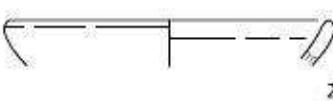


2土



26

3土

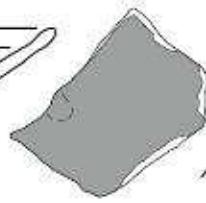


27

9土



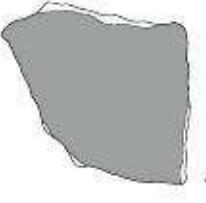
28



29

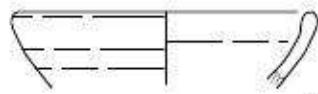


30

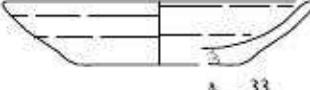


31

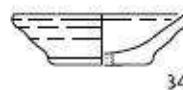
9土・10土一括



32



33



34

10土



35

18土

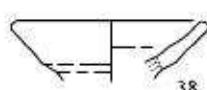


36

23土



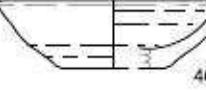
遺構外



38



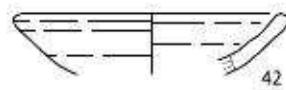
39



40



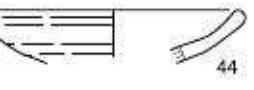
41



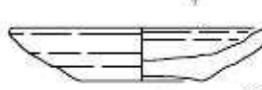
42



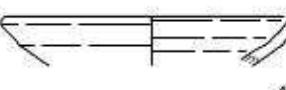
43



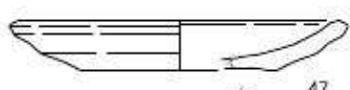
44



45



46



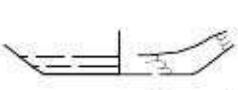
47



48



49



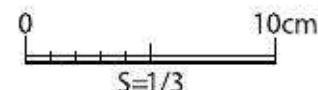
50



51

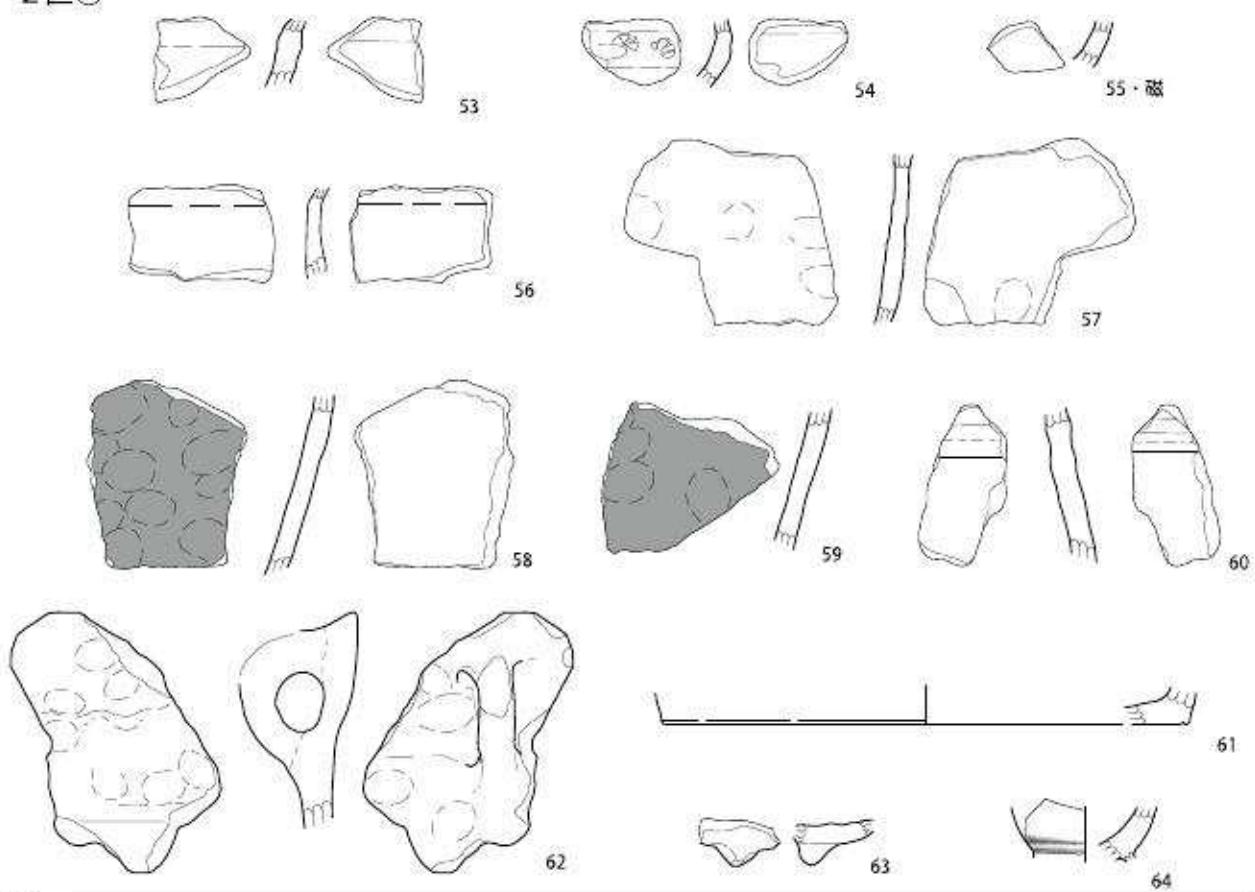


52

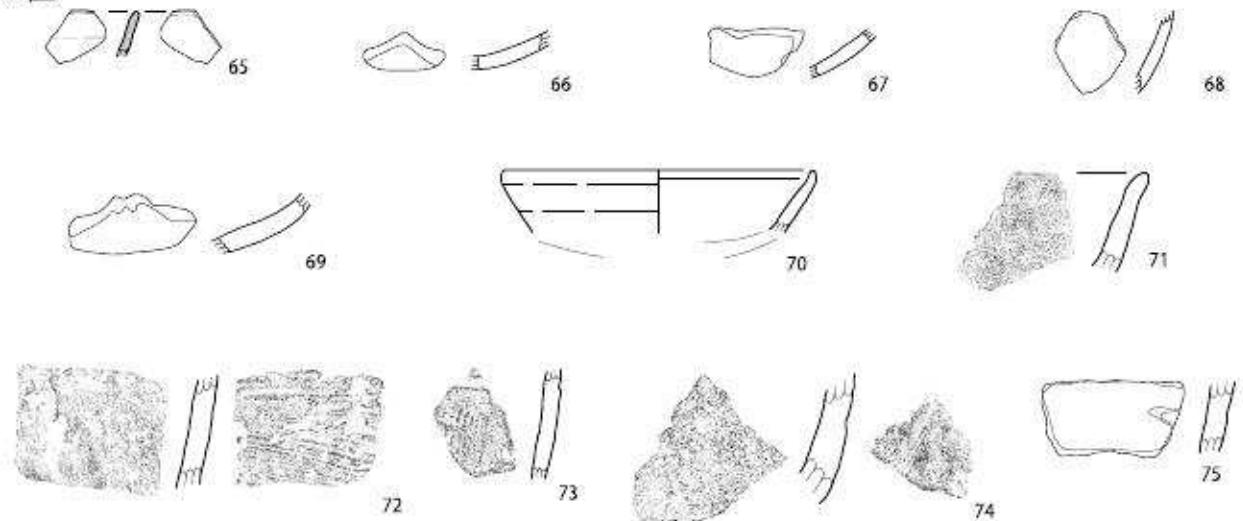


第16図 遺物図版2

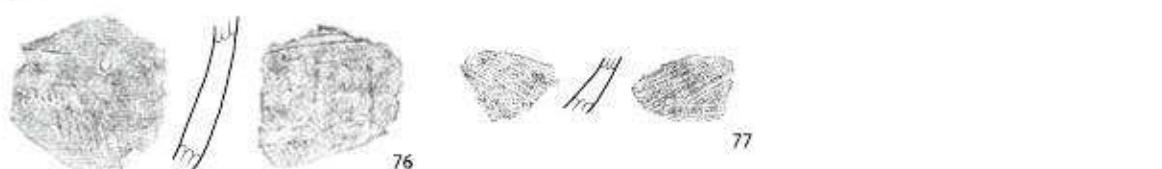
2区②



3区



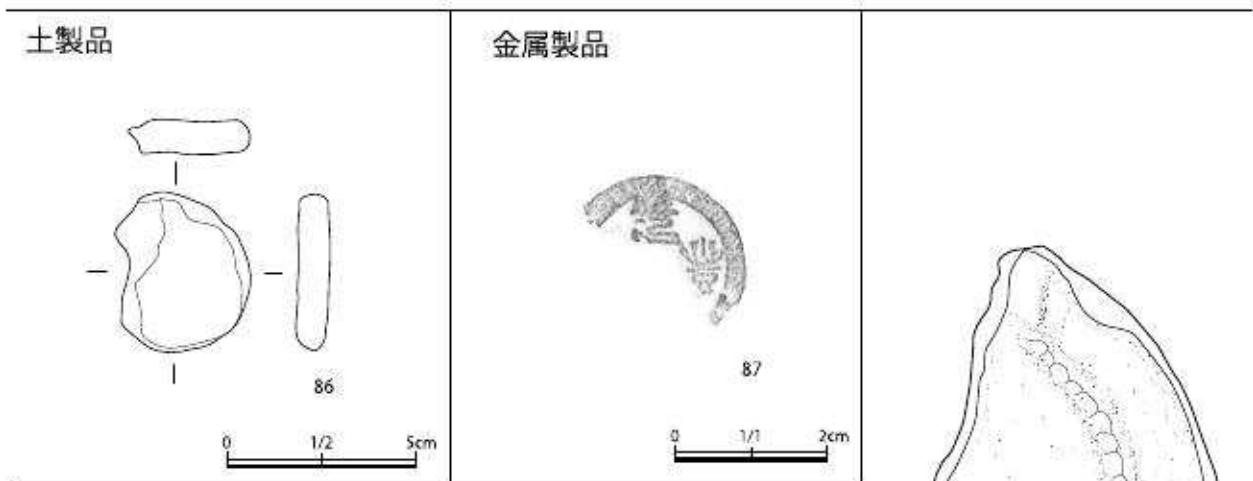
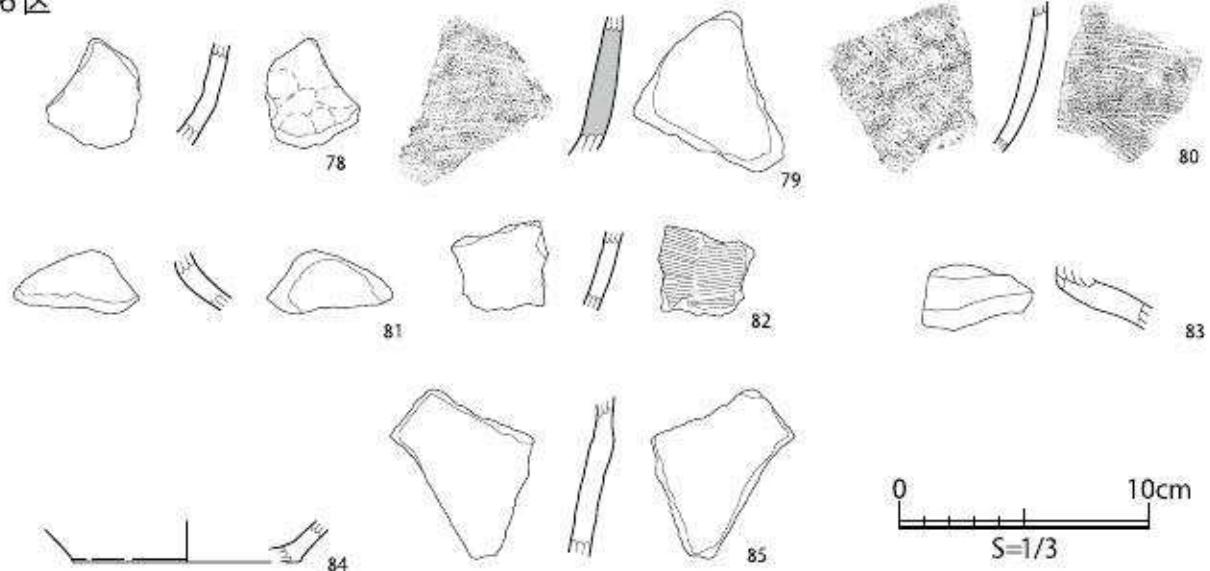
4区



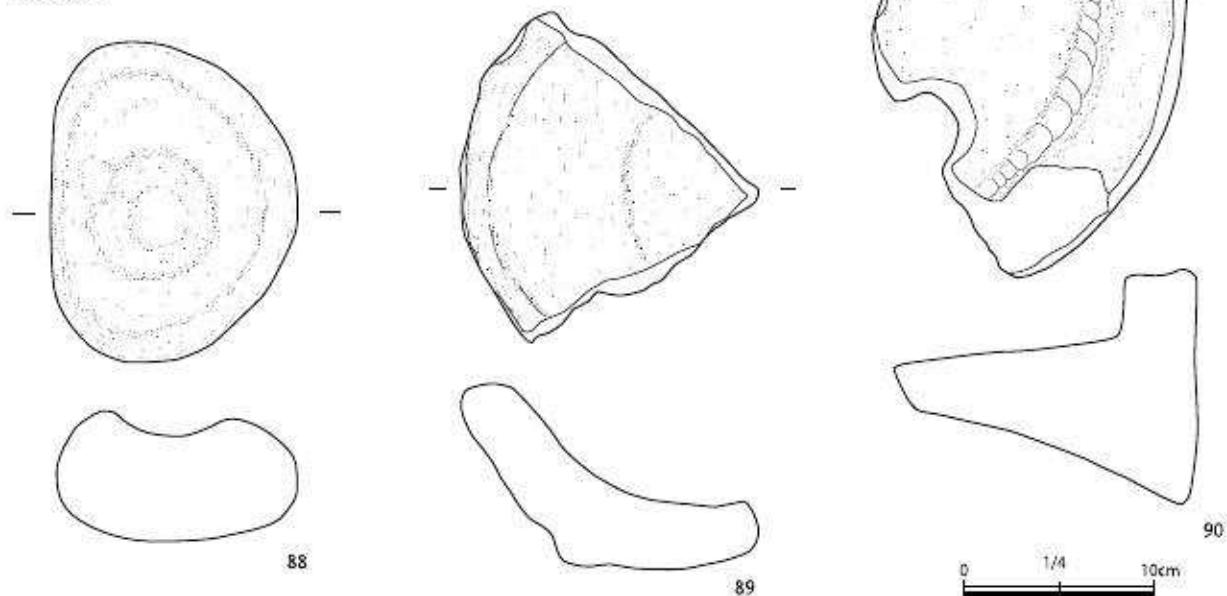
0 10cm
S=1/3

第17図 遺物図版3

6区



石製品



第18図 遺物図版4

第2表 遺構一覧表

土坑

調査区	遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	備考
第1区	1号土坑	第12図	E-21グリッド	不整円形	32	26	16	2土と重複
	2号土坑		E-21グリッド	不整円形	57	50	32	1土と重複
	3号土坑		E-21グリッド	不整円形	50	47	25	
	4号土坑		E-21グリッド	不整円形	83	77	22	
	5号土坑		E-21グリッド	不整円形	42	37	22	
	6号土坑		E-21・22グリッド	円形	153	80	28	
	7号土坑		E-21グリッド	楕円形	86	48	17	
	8号土坑		D-21・22グリッド	不整形	88	42	17	
	9号土坑		D-22グリッド	不整円形	48	40	13	
第2区	1号土坑	第12図	E-12・13グリッド	不整円形	70	52	74	中世の遺物出土
	2号土坑		E-13・14グリッド	不整形	103	65	32	中世の遺物出土
	3号土坑		E-14グリッド	圓丸方形	89	83	52	中世の遺物出土
	4号土坑		E-13・14グリッド	円形?	92	41	30	
	5号土坑		E-14グリッド	楕円形	61	39	24	
	6号土坑		E-14グリッド	不整形	60	47	15	
	7号土坑	第13図	E-14グリッド	円形	77	73	26	8土と重複
	8号土坑		E-14グリッド	楕円形	68	43	20	7土と重複
	9号土坑		E-15グリッド	不整形	83	78	58	10土と重複。中世の遺物出土
	10号土坑		E-15グリッド	不整形	118	103	48	9土と重複、中世の遺物出土
	11号土坑		E-15グリッド	円形	55	52	35	
	12号土坑		E-15グリッド	楕円形	43	32	30	ひで鉢出土
	13号土坑		E-15グリッド	不整円形	43	32	29	
	14号土坑		F-15グリッド	不整円形	50	43	25	
	15号土坑		E-15グリッド	不整円形	49	41	25	
	16号土坑		E-15グリッド	楕円形	47	39	32	
	17号土坑		E-15グリッド	楕円形	45	40	25	
	18号土坑		E-15グリッド	円形	48	33	16	中世の遺物出土
	19号土坑		E-16グリッド	不整円形	47	41	27	
	20号土坑		E-16グリッド	円形	70	64	32	
第3区	21号土坑	第14図	E・F-16グリッド	圓形	96	35	27	
	22号土坑		E-16グリッド	円形	49	48	41	
	23号土坑		E-16・17グリッド	不整形	143	51	28	26ピットと重複、中世の遺物出土
第4区	24号土坑		E-19グリッド	楕円形	71	53	29	
	1号土坑	第14図	F-9グリッド	不整円形	108	66	37	
	2号土坑		F-9・10グリッド	不整円形	108	65	15	5ピットと重複
第6区	3号土坑		F・G-10グリッド	楕円形?	109	76	10	2面で検出
	1号土坑	第14図	G-5・6グリッド	不整円形	60	23	10	
	2号土坑		G-5グリッド	不整形	47	19	13	
第6区	1号土坑	第11図	B-6グリッド	楕円形	103	50	12	
	2号土坑		C-6グリッド	楕円形	84	33	27	
	3号土坑		C-6グリッド	不整円形	165	62	40	

Pit

調査区	遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	備考
第1区	1pit	第12図	E-21グリッド	円形	34	20	22	
	2pit		E-21グリッド	円形	37	34	25	
	3pit		D-21グリッド	円形	42	38	18	
	4pit		D-21グリッド	楕円形?	62	34	17	
	5pit		D-22グリッド	円形	37	35	19	
第2区	1pit	第13図	E-13グリッド	不整円形	36	32	17	
	2pit		E-13グリッド	楕円形	45	30	39	
	3pit		F-14グリッド	不整円形	26	21	28	
	4pit		F-14グリッド	円形	40	37	18	
	5pit		E-14グリッド	不整円形	23	20	31	
第3区	6pit	第12図	E-14グリッド	不整円形	30	28	31	
	7pit		E-14グリッド	円形	37	36	17	
	8pit	第13図	E-14グリッド	楕円形	23	19	7	
	9pit		E-14グリッド	楕円形	23	21	18	
	10pit		E-14グリッド	楕円形	45	41	13	
	11pit		E-14グリッド	楕円形	33	28	17	
	12pit		E-14グリッド	楕円形	32	30	15	13pitと重複
	13pit		E-14グリッド	円形	29	24	19	12pitと重複
	14pit		E-14グリッド	楕円形	31	27	26	
	15pit		E-15グリッド	円形	43	39	27	
	16pit		E-15グリッド	不整円形	33	29	28	
	17pit		E-15グリッド	不整円形	35	29	35	
	18pit		E-15グリッド	不整円形	27	23	14	
	19pit		E-15グリッド	不整円形	21	18	9	
	20pit		E-15グリッド	楕円形	24	21	8	
	21pit		E-15グリッド	不整円形	25	21	17	
	22pit		E-16グリッド	不整円形	35	30	18	
	23pit		E-16グリッド	楕円形	26	22	19	
	24pit		E-16グリッド	不整円形	27	25	18	
	25pit		E-16グリッド	不整円形	35	35	9	
	26pit		E-16・17グリッド	不整円形	56	36	14	23土と重複
	27pit		E-17グリッド	不整円形	33	31	35	
	28pit		E-17グリッド	不整円形	29	25	24	
	29pit		E-17グリッド	楕円形?	34	34	27	30pitと重複
	30pit		E-17グリッド	不整円形	50	40	27	29pitと重複
	31pit		E-19グリッド	不整円形	50	46	34	

調査区	遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	備考
第3区	1pit	第14図	F-9グリッド	不整円形	57	43	36	
	2pit		F-9グリッド	不整円形	43	37	8	
	3pit		F-9グリッド	不整円形	35	31	9	
	4pit		F・G-10グリッド	椭円形?	42	30	13	
	5pit		F-9グリッド	不整円形	63	30	8	2面と重複
	6pit		F-10グリッド	不整円形	31	20	7	
	7pit		F-8グリッド	椭円形?	67	30	25	
	8pit		F-8グリッド	椭円形?	40	26	11	9pitと重複
	9pit		F-8グリッド	椭円形?	31	24	9	8pitと重複
	10pit		F-10グリッド	円形	47	43	15	2面で検出
	11pit		F-10グリッド	不整円形	79	57	21	2面で検出
	12pit		F-10グリッド	椭円形	27	20	11	2面で検出
第4区	1pit	第14図	G-7グリッド	不整円形	63	58	6	
第6区	1pit	第11図	B・C-6グリッド	椭円形	60	28	22	
	2pit		C-6グリッド	椭円形	65	43	15	
	3pit		B-6グリッド	椭円形	43	31	14	
	4pit		B-5グリッド	円形	24	20	19	
	5pit		B-5グリッド	円形	20	20	17	

清状遺構

調査区	遺構名	図版番号	位置	断面径	現存長(cm)	幅(cm)	深度(cm)	備考
第1区	1溝	第12図	D-23グリッド	逆台形	370	170	80	近世陶磁器片出土
	2溝		D-23グリッド	逆台形	290	25	15	近世陶磁器片出土
第2区	1溝	第14図	F-14グリッド	逆台形	180	60~80	25	近世陶磁器片出土
	1溝		F-10グリッド	逆台形	220+80	75	20	平安時代の遺物出土

焼土

調査区	遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	備考
第1区	1号焼土	第12図	D-24グリッド	椭円形	33	21	7	
	2号焼土		D-23グリッド	円形	32	31	6	
	3号焼土		D-23グリッド	椭円形	60	33	5	

第3表 出土遺物一覧表

土器・陶磁器

No.	図版	出土地点	種別	器種	口/高/底(cm)	整形技法	色調	時期	備考
1	第15図	1区	弥生土器	壺	-/-		にぶい赤褐色	弥生後期	内外赤彩
2		1区	土師器	壺	-/-	外：ケズリ 内：ミガキ	明褐色	古墳中期	
3		1区	土師器	甕類?	-/-	外：ミガキ 内：ケズリ	暗褐色	弥生後～古墳前	
4		1区	弥生土器	壺	-/-	外：ミガキ	明褐色	弥生後期	
5		1区	弥生土器	甕	(20.6) / -	外：ミガキ 内：ヨコナテ	明褐色	弥生後期	口縁部継ぎ沈線
6		1区	弥生土器	壺	-/-	内外：ミガキ	暗褐色	弥生後期	
7		1区	弥生土器	壺	-/-	外：ミガキ	にぶい赤褐色	弥生後期	
8		1区	瓦器	鍋?	-/-	ロクロ整形	灰白色	中世	
9		1区	磁器	碗	-/1.8/-	染付 透明釉 記前	灰白色	近世後半	
10		1区 2溝	磁器	碗	-/-		緑灰色	近世?	
11		1区	陶器	甕	-/(3.2) /-	外：灰釉	暗オリーブ色	近世	
12		1区	陶器	片口	(9.0) / -	内外：灰釉	オリーブ黄色	近世	
13		1区	磁器	碗	(11.0) / -	染付 透明釉 竹文	灰白色	19C ~	
14		1区	土師質土器	かわらけ	(10.0) / -	ロクロ整形	橙色	中世	
15		1区	陶器	鉢	-/(2.4)/8.6	ロクロ整形	にぶい赤褐色	近世	外：スス付着
16		1区	磁器	碗	-/残 2.0/(4.0)	染付 透明釉	灰白色	近世後半	
17		1区	陶器	壺?	-/(1.5) /-	内外：透明釉 つまみ基部残存	明黄褐色	近世	
18		1区	磁器	皿	-/-	蛇の目高台 染付 透明釉	灰白色	近世	
19		1区	磁器	紅猪口	(4.5)/1.0/(1.8)	内：透明釉	明綠灰色	近世～近代	
20		1区	土師質土器	内耳罐	-/-/(9.5)		黒褐色	中世～近世	
21		1区	土師質土器	内耳罐	-/残 4.2/(27.0)		褐灰色	近世	
22	第16図	2区	弥生土器	壺	-/-	頸部櫛振波状文	にぶい黄褐色	弥生後期	
23		2区	弥生土器	壺	-/-	頸部櫛振波状文	橙色	弥生後期	
24		2区	弥生土器	壺	-/-/(6.8)	内外：ケズリ	にぶい橙色	弥生後期	
25		2区 1土	土師質土器	内耳罐	-/(5.1)/-	内：ナテ	褐灰色	中世	外：スス付着
26		2区 2土	土師質土器	かわらけ	(11.0) / -	ロクロ整形	橙色	15C ~ 16C	
27		2区 3土	土師質土器	かわらけ	(13.0) / -	ロクロ整形	橙色	16C	
28		2区	土師質土器	かわらけ	14.0/2.8/7.0	ロクロ整形 底部回転系切	橙色	16C 後半	ほぼ完形
29		2区 9土	土師質土器	内耳罐	-/-		黒褐色	中世	外：スス付着 指輪圧痕
30		2区	土師質土器	内耳罐	-/-		黒褐色	中世	外：スス付着
31		2区	土師質土器	内耳罐	-/-		黒褐色	中世	外：スス付着
32		2区 9-10土	土師質土器	かわらけ	(12.0) / -	ロクロ整形 内外：ヨコナテ	にぶい褐色	中世	
33		2区	土師質土器	かわらけ	(12.4)/2.5/(6.4)	内外：ナテ	橙色	15C ~ 16C	
34		2区	土師質土器	かわらけ	(7.0)/2.0/(4.0)	内外：ナテ	にぶい赤褐色	16C	
35		2区 10土	土師質土器	かわらけ	-/-/(6.0)		橙色	中世	
36		2区 18土	土師質土器	かわらけ	12.2/2.0/-	ロクロ整形	橙色	15C ~ 16C	
37		2区 23土	土師質土器	内耳罐	-/-		灰黃褐色	中世	外：スス付着

No.	図版	出土地点	種別	器種	口 / 高 / 底 (cm)	整形技法	色調	時期	備考
38	第16図	2区	土師質土器	かわらけ	{7.4}/(2.0)/-	ロクロ整形	褐色	15C~16C	
39		2区	土師質土器	かわらけ	7.6/1.8/4.0	ロクロ整形 底部回転糸切	橙色	16C	
40		2区	土師質土器	かわらけ	{9.0}/2.7/(4.0)	ロクロ整形	に赤い褐色	15C~16C	
41		2区	土師質土器	かわらけ	(10.0)/2.3/(5.0)	内外:ナテ	に赤い褐色	15C~16C	
42		2区	土師質土器	かわらけ	-/-/(11.0)	ロクロ整形	褐色	15C~16C	
43		2区	土師質土器	かわらけ	-/-/(10.0)	ロクロ整形	に赤い褐色	15C~16C	
44		2区	土師質土器	かわらけ	(10.2)/-/	ロクロ整形	に赤い褐色	15C~16C	
45		2区	土師質土器	かわらけ	(10.4)/2.1/(5.2)	ロクロ整形 底部回転糸切	明赤褐色	16C	
46		2区	土師質土器	かわらけ	(11.6)/-/	ロクロ整形	褐色	15C~16C	
47		2区	土師質土器	かわらけ	(12.6)/2.0/(7.8)	外:ロクロナテ	に赤い黄褐色	16C	ロクロナテ粗錐
48		2区	土師質土器	内耳鏡?	-/(3.7)/-		に赤い黄褐色	中世	
49		2区	土師質土器	かわらけ	-/-/(7.0)	ロクロ整形 底部回転糸切	明赤褐色	15C~16C	
50		2区	土師質土器	かわらけ	-/-/(6.0)	ロクロ整形 底部回転糸切	褐色	15C~16C	
51		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-		黒褐色	中世	外:スス付着
52		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-		灰褐色	中世	
53	第17図	2区	土師質土器	内耳鏡	{3.9}/-/		に赤い褐色	中世	外:スス付着
54		2区	土師質土器	香炉?	(2.7)/-/	ロクロ整形	褐色	中世	半菊花文
55		2区	青磁	碗	-/-		灰オーライブ色	中世か	食入あり 二次被焼あり
56		2区	土師質土器	内耳鏡	(3.80)/-/	ロクロ整形	に赤い褐色	中世	
57		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-/(6.7)/-	ロクロ整形 内外指頭痕	明褐色	中世	外:スス付着
58		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-	指頭痕	黒褐色	中世	外:スス付着
59		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-	ロクロ整形 指頭痕	黒褐色	中世	外:スス付着
60		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-	ロクロ整形	黒褐色	中世	
61		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-/(20.8)	ロクロ整形	灰褐色	中世	
62		2区	土師質土器	内耳鏡	-/-	ロクロ整形 内面指頭痕	黒褐色	中世	把手部
63		2区	土師質土器	香炉	-/(1.8)/-	脚部ケズリ出し	に赤い黄褐色	中世	脚部
64		2区	磁器	碗	-/-		灰白色	近世	
65		3区	須恵器	ハソウ	-/(2.1)/-		灰色	古墳中か	口縁
66		3区	土師器	环	-/-残 1.5/-	ヨコハケ ケズリ?	明赤褐色	古墳中~後	
67		3区	土師器	环	-/-残 3.1/-	ヨコハケ 指頭痕	明赤褐色	古墳中~後	
68		3区 1号溝	土師器	环	-/-残 3.3/-	ヨコナテ	明赤褐色	平安	甲斐型环
69		3区	土師器	环	-/-残 2.3/-	ヨコナテ	に赤い黄褐色	古墳	
70		3区	土師器	高环	(12.2)/残 2.5/-	外:エビナテ	褐色	古墳中~後	
71		3区	土師器	鉢	-/(4.6)/-	内外:ヘラナテ	に赤い褐色	古墳中~後	
72		3区	土師器	皿	-/(4.9)/-	外:ナテ 内:ヨコハケ	に赤い黄褐色	5~7C	
73		3区	土師器	甕?	-/(4.3)/-	外:ハケ	明褐色	不明	
74		3区	土師器	甕	-/(5.2)/-	外:ヘラナテ 内:ヘラケズリ	に赤い褐色	古墳中~後	
75		3区	土師器	甕	-/(3.0)/-	内外:ナテ	に赤い黄褐色	古墳?	スス付着
76		4区	土師器	甕	-/-	ロクロ整形	明褐色	8C	
77		4区	土師器	甕	-/-	内外:ハケ	褐色	古墳中~後	
78	第18図	6区	土師器	甕	-/-	内:指頭痕	に赤い褐色	古墳	
79		6区	須恵器	提瓶か	-/-	外:環状のケズリ	灰色	6C~8C	
80		6区	土師器	甕	-/-	内外:ハケ調整後ヘラナテ	黒褐色	古墳	外:スス付着
81		6区	土師器	甕か壺	-/-	内:ケズリ	明褐色	古墳	
82		6区	土師器	甕	-/-	外:ヘラナテ 内:ハケ	に赤い黄褐色	古墳	内:スス付着
83		6区	土師器	甕	-/-残 2.6/-	内:ヨコハケ	に赤い褐色	古墳	
84		6区	土師質土器	かわらけ	-/-/(9.0)	ロクロ整形	褐色	中世	
85		6区	土師質土器	内耳鏡	-/-		黒褐色	中世	外:スス付着

土製品

No.	図版	出土地点	種別	最大長 / 幅 / 厚 (cm)	整形技法	色調	時期	備考
86	第18図	2区	土製円盤	4.3/3.7/0.95	内耳鏡破片を利用	に赤い褐色	中世	

金属製品

No.	図版	出土地点	種別	最大長 / 幅 / 厚 (mm)	銭種	重量 (g)	時期	備考
87	第18図	3区 1号 小豊穴状遺構	銭貨	{残 22.4} /-/1.0	元豐通寶	1.1	中世か	

石製品

No.	図版	出土地点	器種		最大長 / 幅 / 厚 (cm)	石材	重量 (g)	時期	備考
88	第18図	1区	凹石		13.1/17.1/7.1	安山岩	2,400	不明	
89		2区 12土	ひで鉢		15.9/17.8/4.6	安山岩	1,200	中世~近世	
90		2区 1号井戸	石臼		30.0/16.9/29.8	安山岩	5,240	近世以降?	上臼

第4章 総括

①古代以前の土地利用について

今回の調査区からは、弥生時代後期から近現代に至るまで、様々な遺物が出土しており、当地点の連続的な土地利用が垣間見える。

弥生時代後期の土器群については、調査区1区の1号溝状遺構よりも北側を中心に出土が認められた。1号溝状遺構は併走する2号溝状遺構と同様、近世以降に掘り込まれたものと推定されるが、弥生時代の遺物の出土地点周辺には3基の焼土跡があることから、もともとは該期の建物跡などの遺構があった可能性も考えうる。1区1号溝以南から2区に至るまでは、わずかに弥生時代後期の遺物が出土しているものの、流れ込みとみられる。現代に至るまでの度重なる開発によって、2区周辺では弥生時代の遺物包含層が失われていると解釈できる。

古墳時代では、韮崎市教育委員会の平成7年度調査地点で中期の住居跡が調査されているが、近接する1区や2区、最南端の5区では該期の遺物の出土はほとんどなかった。一方、3区・4区・6区では、小破片が多く時期を断定するには至らないものの、古墳時代中期から後期とみられる土器片がまばらに出土した。覆土より遺物の出土がなかった3区の1号・2号竪穴住居跡も該期まで遡る可能性がある。このことから、当地点周辺では面的に密な遺構分布となる環境ではなかったと思われ、当時の微高地などの環境的な要因によって居住空間が展開されていたと推定される。

奈良～平安時代にかけては、3区から4区でまばらに遺物の出土が認められるが、居住域である可能性は低い。

②中世から近代にかけての土地利用について

調査区の「相堀塙址」範囲となる1区・2区からは、かわらけや内耳鍋などの中世の土器類や、近世～近代の陶磁器・土器類が出土している。2区のかわらけは、遺構外出土のものが多いが、すべてロクロ整形によるものであり、型式的には大きな差異を見いだしにくい。このうち、2区9号土坑の資料を、佐々木編年（佐々木2004）より年代推定すると、第16図28は直線的に開く口縁や、34の存在から法量分化が進んだ段階と想定され、およそ16世紀後半頃に求められる。破片資料に対しての型式学的検討は避けておくが、そのほかの出土かわらけもおよそ15世紀後半から17世紀初頭に収まるものと思われる。

さて、相堀塙址は『山梨県の中世城館跡』で城館跡の可能性を指摘されるものの、その内容については全く不明であった（山梨県教育委員会1986）。しかし、今回の調査において中世後半段階の資料が範囲内より多数みつかったことから、戦国期になんらかの施設が当地にあったことは間違いかろう。ここで注目されるのは、逸見路の存在である（第3図）。逸見路は穂坂方面より塩川を渡り、相堀塙の南西角で直角に曲がり北進していく（山梨県教育委員会1988）が、このルートの成立が近世以前に遡るのであれば、甲府方面と新府城方面を結ぶ交通の要所となる。また、塩川の対岸、遺跡より直線で東方500mにある小森山の神遺跡（第3図60）は、築江砦と推定されており、そこから700m上流には天正壬午の乱の際に徳川家康が陣取ったという日之城址（日ノ出砦、同図51）も位置している（韮崎市教育委員会1999）。激動の中世韮崎のなかで、相堀塙に館などの施設があったと推定したいが、土塙部分（あるいはそれに伴う堀）の調査を行い、詳しい築造年代や、その役割を検討する必要があるだろう。なお、第2章にも記したが土塙の北側には昌安寺があり、無視できない存在である。さらに当地には向山姓が多く、武田氏に仕えた向山氏との関係も気になるが、紙幅の都合もありこれらは今後の課題としておきたい。

近世から近代にかけての遺構・遺物はまばらで、中世からは安定した土地利用かと思われるが、文政8(1825)年の丸石道祖神の存在などにあるように、その後は街道沿いの村落として発展を遂げたものと思われる。

【参考文献】

- 佐々木溝 2004 「山梨における中世土器の様相」『山梨考古学論集』V pp.213-232 山梨県考古学協会
韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会 1996 「枇杷塙遺跡」
韮崎市教育委員会・白山城跡学術調査研究会 1999 『白山城の総合研究』
山梨県教育委員会 1986 『山梨県の中世城館跡』
山梨県教育委員会 1988 『逸見路』山梨県歴史の道調査報告書第14集

写真図版 1



調査前状況



発掘調査風景



土層堆積状況（1区）



1区 土坑群完掘状況



1区 1号溝状遺構



2区 北側完掘状況

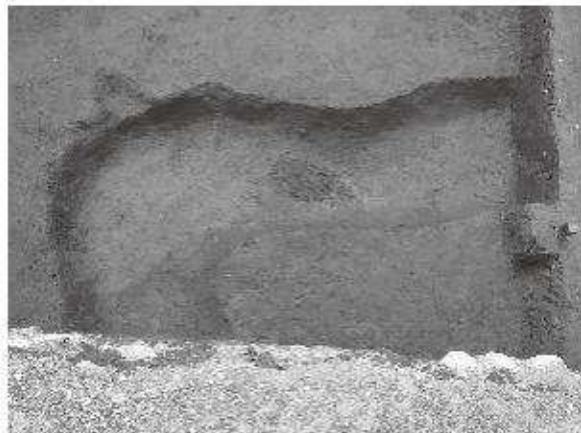


2区 土坑群

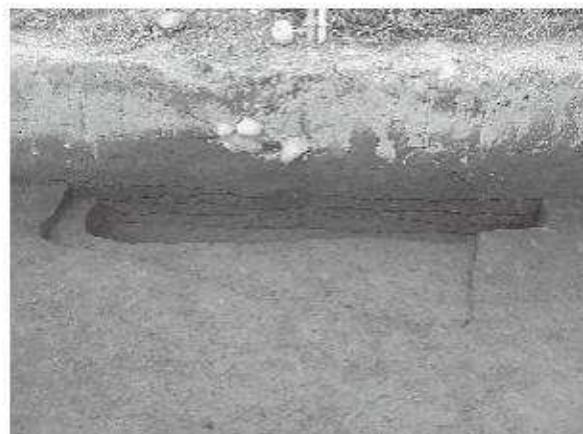
写真図版 2



2区 南側完掘状況



3区 1号溝状遺構



3区 1号・2号竪穴住居跡



3区 土坑・小竪穴状遺構



3区 完掘状況

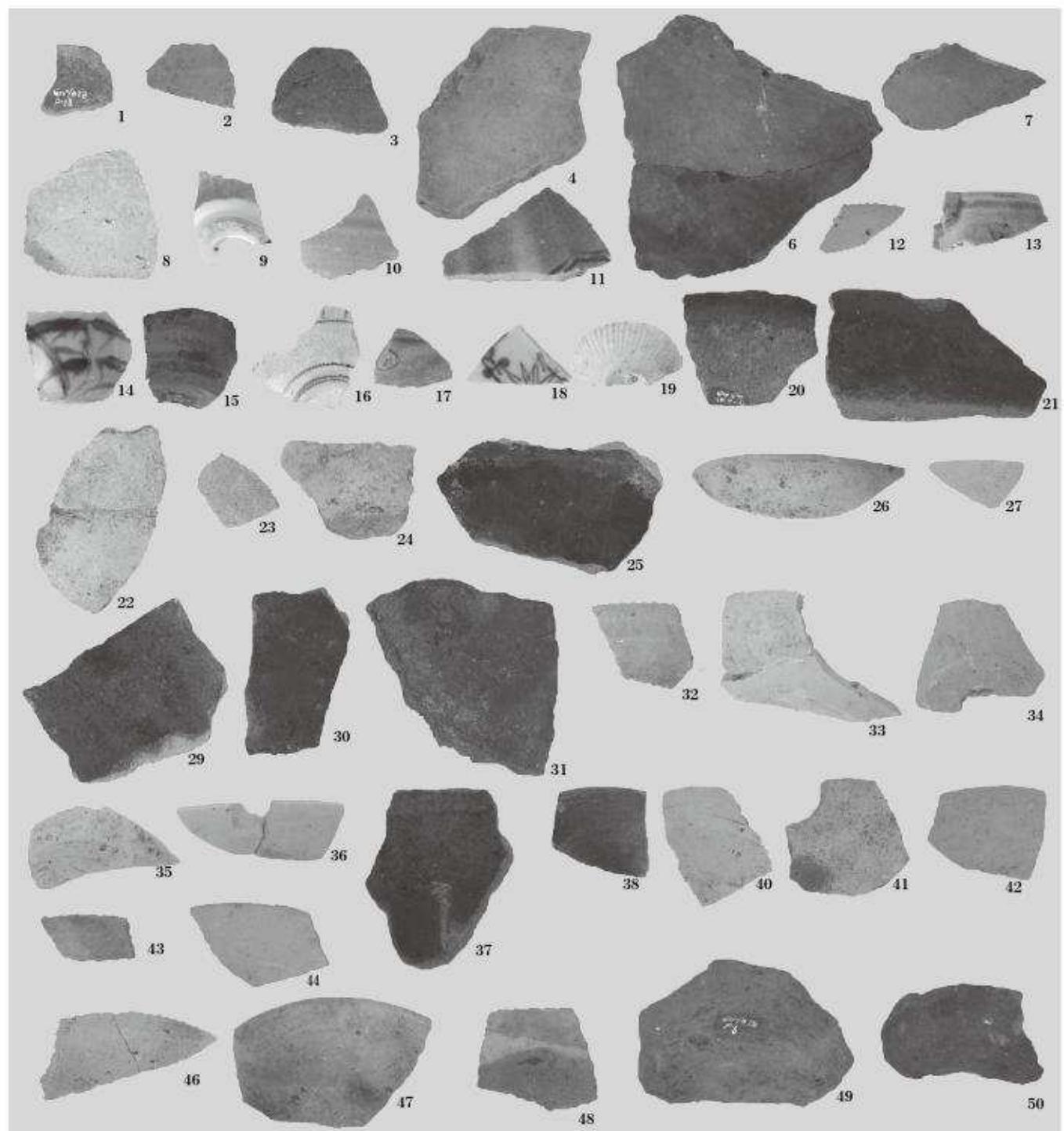
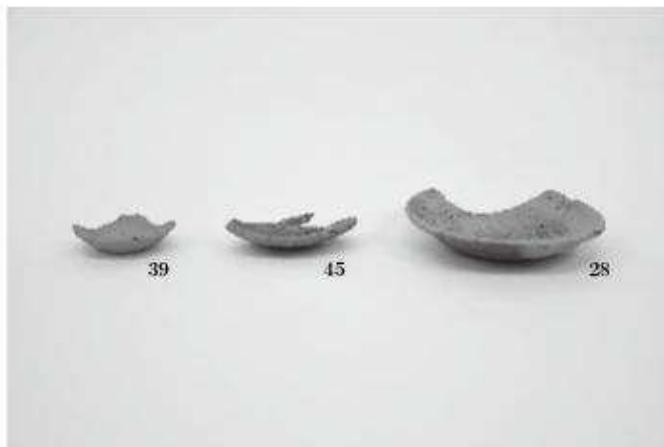


4区 完掘状況

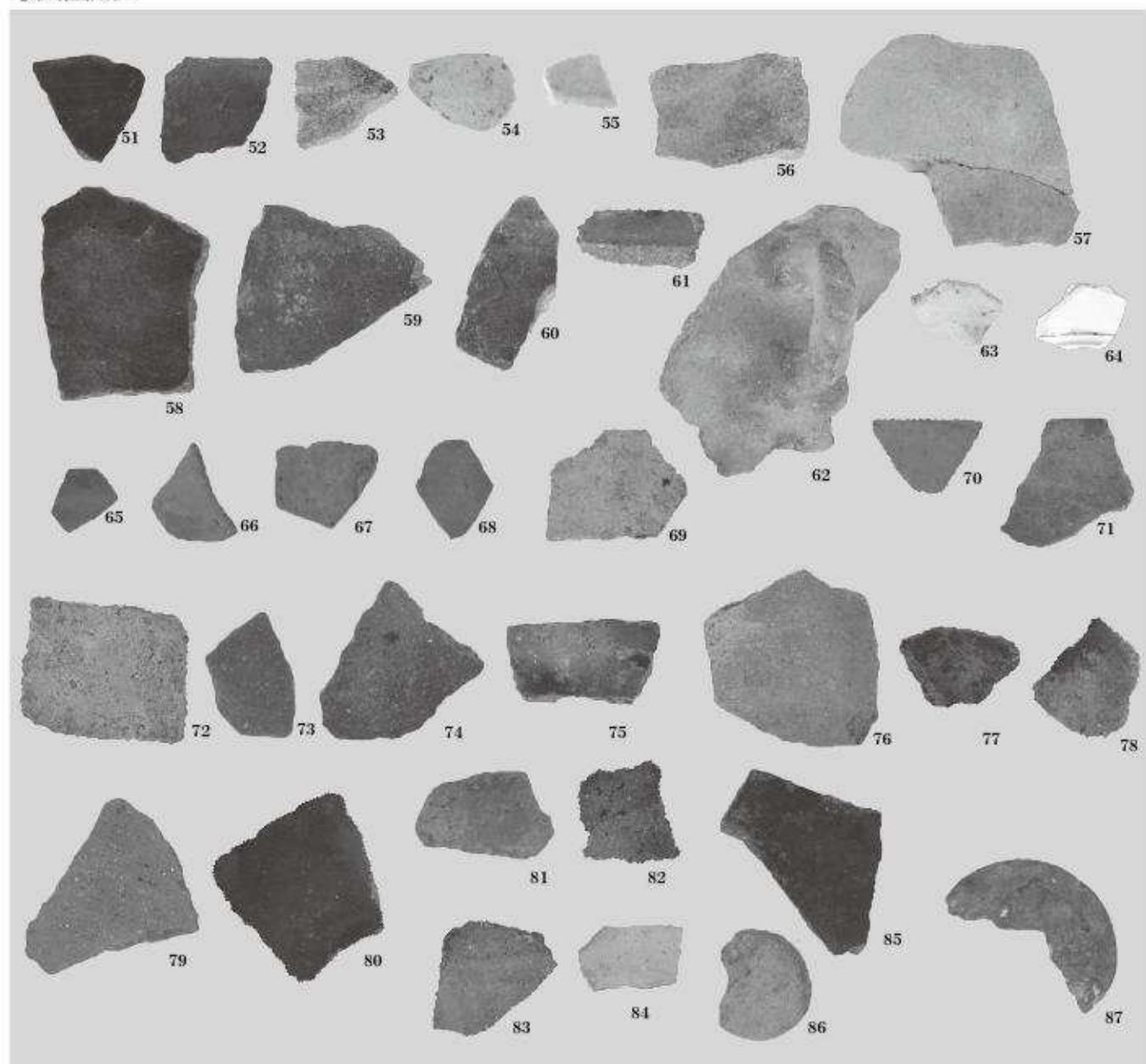


6区 完掘状況

写真図版 3



写真図版4



報告書抄録

ふりがな	びわづかいせき・あいぬたるいし							
書名	枇杷塚遺跡・相堀塁址							
調書名	国道141号相堀交差点改良工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第319集							
編集者名	熊谷晋祐・長田隆志							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL055-266-3016							
発行機関	山梨県教育委員会・山梨県県土整備部							
発行日	2019年2月28日							
ふりがな所 収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面 積	調査原因
びわづかいせき 枇杷塚遺跡 あいぬたるいし 相堀塁址	韮崎市藤井町 北下條字枇杷 塚地内	19207	枇杷塚遺跡 F-43 相堀塁址 F-31	35° 72' 74'	138° 45' 90'	20170615 ~ 20170901	392m ²	道路
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡 城館跡	弥生時代 古墳時代 中世 近世	竪穴住居跡2軒、小竪 穴状遺構1基、土坑41 基、ピット55基、溝状 遺構4条、焼土跡3基、 井戸1基		弥生土器（後期）、土師器 (古墳時代中期～平安)、土 師質土器（かわらけ・内耳 鍋）、陶磁器、古銭、土製 円盤、石製品		初めての発掘調査と なった相堀塁址範囲内 より、16世紀を中心と した遺物が出土した。	

要約	国道141号相堀交差点改良工事に係り実施した、枇杷塚遺跡と相堀塁址の発掘調査報告書。枇杷塚遺跡は平成7年度の韮崎市教育委員会の調査によって古墳時代中期の遺構が発見されており、今回本格的な発掘調査は二回目となる。相堀塁址は枇杷塚遺跡の範囲内に長方形の区画が残る城館跡とされている。調査の結果、古墳時代まで遡る可能性のある竪穴住居跡2軒、中世と考えられる小竪穴状遺構1基、主に中世と考えられる土坑41基とピット55基、ほかに溝4条、焼土跡3基、井戸1基が検出され、弥生時代後期から近現代に至るまでの遺物が出土した。遺跡のある地点は藤井平といい、古来より肥沃な穀倉地帯として知られており、周辺にも弥生時代後期から古墳時代の遺跡が多く、島状に分布する標高地上に集落を展開している様子が改めて確認された。 相堀塁址は現在も土壘が一部に残っているが、その内容は全く不明であった。今回の調査で相堀塁址の範囲内より、中世とくに16世紀後半頃を中心とした遺物の出土が認められ、戦国期における館等の施設の存在が想定できるようになった。土壘部分の調査や施設の性格、関係氏族などが今後の課題として挙げられる。
----	---

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第319集

枇杷塚遺跡・相堀塁址

国道141号相堀交差点改良工事に伴う発掘調査報告書

印刷日 2019年2月21日

発行日 2019年2月28日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

発行 山梨県教育委員会・山梨県県土整備部

印刷 株式会社 峠南堂印刷所

